

衰弱して無感覺と爲る如く罪の眠に耽るの靈魂も亦其勢力衰へ凡て  
 信と望と愛とを關することと對して無感覺と爲るなり例へば彼れ靈  
 魂に向て神の子は汝の爲に地に降り汝を永遠の死より救はんが爲に  
 人と爲れることを告げ彼れの救贖の教彼れの奇蹟彼れの苦難十字架  
 の死のこと復活及び昇天のこと彼れの再臨のことを説けよ彼は此言  
 を容れず神の恩恵を感じず眠りて信と望と愛との爲に全く眠れるな  
 り公義の審判者來世の苦難寐ねざるの蟲消えざるの火は彼れ之を懼  
 れず彼は眠りて聞かず見ず感ぜざるなり身体の眠の心より始まるこ  
 とも亦宜く注意すべきことなり先きよ心眠り次で身体寝ぬるに至る  
 なり眠れる者の目は塞がりて視えず耳聞えず罪の眠に耽るの靈魂も

亦是の如し而も靈魂は「我は眠りたれどもわが心は醒るたり」(雅歌五の  
 二)と云ふが如く縦令睡眠中と雖も常よ心の目よて視ざるべからざる  
 なり。  
 ○凡ての勢力心理に在ることは汝之を認めざる能はざるべし心中爽  
 快なる時は全體爽快を覺え心中懊惱たる時は全身鬱々たり而して汝  
 之を爽快にせんとせば信仰に依るの外なかるべく就中特よ信仰の場  
 所たる聖堂に於て之を得べし神は茲に於て己の人を淨むる恩寵を以  
 て汝等の心よ感觸し汝等よ負はしむるよ己の輕き荷を以てす是れ衆  
 人の宜く知得すべき大秘密なり心中爽快なる時は踴躍自ら禁ずる能  
 はず故にダヴ非ドも主の匱のまへに舞躍れり(撒母後六の十六)。

○人汝を罵詈し汝之より由りて佛然憂悶する時は是れ汝に慢心あるを  
 示すものにして汝須らく之を打破し外部の汚辱を以て心より逐斥せ  
 ざるべからず夫れ然り故に汝は嘲笑せらるゝも激昂せず汝を憎む者  
 汝を罵詈する者より對して憎惡の念を懐かず乃ち神が汝をして豁然大  
 悟謙遜の尊ぶべきを知りて彼等の爲め神より祈らしめんとて神の汝より  
 遣はし、汝の良醫として彼等を愛すべし。汝等を誣ふ者を祝せよ馬太  
 五の四十四。汝自ら言ふべし彼等は我を誹毀するよ非ずして我が怨を  
 誹謗するなり彼等は我を打つよ非ずして我が心より巢窟を作り誹謗を  
 受くる時痛く我が心を刺激するの毒蛇を打つのみ想ふよ是彼の善良  
 なる人々が其の毒やしき語を以て我が心中より之を驅逐するものよ

して心復た之より刺激せらるゝことなかるべしとの意思よて自ら慰む  
 と汝は外部の侮辱を蒙りたる爲め神より感謝せよ此世より於て侮辱を受  
 けたる者は彼の世より於て之を受けざればなり其の諸の罪によりて受  
 けし所は倍したり以賽四十の二爾は爾の平和を我等より賜はん蓋し爾  
 は凡て我等の爲よ之を成せばなり(同上廿九の十二)  
 ○汝己の罪の赦を得んことを祈る時は宜く赤心より出るの祈禱より由  
 りて常に吾人の罪を赦さんとするの意ある神の慈憐を確信して堅く  
 之より倚頼し堪へ難き憂鬱と已むを得ざるよ出るの流涕よて顯はるゝ  
 の失望よて其心を蔽はれざらんことを努むべし汝の神の慈憐より對す  
 る罪は如何なるよもせよ只汝は誠心悔悟せば可なるのみ而も人は祈

禱するは當りて己の罪重くして神の慈憐は超ゆるものゝ如くは思惟して心窃は其罪赦されざらんと思念すること往々之れあり。されば其人は縦令本意は出てざる涙の泉は流るゝとも果して罪の赦を得ず憂悲鬱屈したる心を懷きて慈憐深き神より去るものにして是れ其自業自得なり。主曰く必ず得べしと信せば之を得べしと馬可十一の廿四神は求むる所のもの必ず之を得べしと信せざるは是れ神は對する誹謗なり。

○凡そ眞實なるもの神聖なるものを信せざる時は智は常は蒙昧と爲り不信の心は恐怖と悒鬱とに煩はざるゝも眞誠の信ある時は怡々快快生命の豁然たるを覺え智も亦煌々として遠く洞見するを得べし是

豈は眞理が心の無智は勝を制したるの明證は非ずや。是豈は心の偽は傾き易き明證は非ずや。然り心が眞實なるもの神聖なるものを信せざるよりして自ら苦しむ所以のものは是れ其の信せざる所のものゝ眞理たる確兆なり。心は眞理は疑を挿み其の決して絶滅すべからざるものを絶滅せんとせば自ら亡ぶるも眞誠の信を懷く時心の快活たるは是れ汝が信する所のものゝ眞理たる確兆なり。何となれば吾人の信する所のものは吾人の心は生命を賦し其生命を改新強盛すればなり。罪は感染したる吾人の心は生命の空庫なり。故に罪は死にして生は非ず。生命の圓滿は吾人以外に在るなり。然れども此の心靈的の生命は無形にして無形個位的の生命なる神は對する信仰は由り吾人へ傳へらる

るが故、吾人の心よ生命を導き入るゝものは吾人の神よ對する眞誠の活信なり。信なくんば心は自ら生命の減縮の兆たる憂鬱を感すべきは理の當然なり。然れども信と共亦必ず吾人の心靈的動作、其信仰の目的物と相吻合せざるべからず、何となれば其動作たる徳義的のものなればなり。

○肉のことを念ふは死なり、靈のことを念ふは生なり。安なり。羅馬八の六、誰か此の使徒の言よ、首肯せざる者あらんや、肉体の思念は實よ死なり、利慾深き者、貪婪の者、嫉妬深き者、利己心の強き者、傲慢の者、名譽を是れ慕ふの徒よ、茲よ來りて吾人をして試よ、汝を諦視し、汝の行爲、汝の生活、を瞥見せしめよ。汝若し望まば、汝の心中の念慮を吾人よ吐露せよ。吾

人は汝——活きたる實例よ由りて肉のこの念は死なりとのことを確めん。汝は眞誠の生命よて生活せず、汝は心靈的の死者よして、自由の身ながら内心束縛せられ、智慧あり乍ら無智者よ等し。汝の中の光暗ければなり。馬太六の廿三、汝は五官を以て凡て眞實なるもの、神聖なるもの、善なるもの、美なるものを以て樂ひを得べき心、を神より受けたるも、汝は肉体の思念よて其の心中よ高尚の感情、高尚の情念を撲滅したり。汝は死人なり、爾曹よ生命なし。約翰六の五十三、只夫れ靈のことを念ふは生なり。安なり。ハリスティアニシして、信仰に適ふの生活を爲し、己の慾を絶ちて、凡そ眞實なること、凡そ敬ふべきこと、凡そ公義こと、凡そ清潔こと、凡そ愛すべきこと、凡そ善稱あること、すべて何なる徳何なる譽の

こと(腓立比四の八)を思念する者試に來りて汝が肉体の思念は由りて  
 心は感ずる所のことを吾人よ告げよ汝吾人よ告げて云はん予は心よ  
 常は聖神よ由るの平和と歡樂(羅馬十四の十七)を感ず予は心の快活生  
 命の潤澤を感じ凡て肉のことを冷笑し肉体の思念が如何にして肉体  
 の人々の心の上は斯かる至大の勢力を有するかに驚き神を愛する者  
 に備へられたる在天の心靈的の不可見幸福を觀察せんことを勉むと  
 ○神より人よ賦與せられ人をして善人たり又惡人たるを得せしめ其  
 の罪は陥るに及んでは人をして惡なり易く善なり難からしめたる自  
 由の賜の人を誘惑すること何ぞそれ夥しきや動もすれば造物主よ  
 罪を歸して曰ふ神は何爲ぞ斯の如くよ吾人を創造し何故吾人をして

罪は陥り惡を行ふこと能はしめざる如く造らざりしやと又或者は神  
 あるを意に介せず全世界を其の凡ての顯象及び諸物と共に個体なく  
 自由なく獨立せざる者と見做し己れ亦其部分なるが故人間の罪は陥  
 りたる因を以て萬有造物の不完全は歸せんとす教會より遠ざかるの  
 結果此の如し汝妄想者の愚昧は陥ること甚矣哉而も我が三歳の童子  
 すら汝等の知らざる所の事を知ること明瞭的確たり汝等は造物主よ  
 罪を歸せんとす汝等彼れの聲は耳を傾けず己れの不品行と忘恩とに  
 由りて彼れの仁慈睿智及び全能の至大の賜——即ち神の像の抹殺せん  
 として抹殺すべからざる似顔なる自由を惡用したることよ關して彼  
 果して罪あるか彼が此賜を受けたる者の妄恩をも意とせずして此の

賜を予へ其仁慈をして萬民に太陽よりも煌々として輝かしめんとし  
 たるを見て益々彼を善者と認めざるべからざるに非ずや吾人の罪は  
 陥り彼より遠ざかりて心靈的の滅亡を來たす及び此世は朽壞べき  
 人の像は似せて羅馬一の廿三己の獨生子を遣はし吾人の爲め彼をし  
 て苦を受け死に付するに至らしめたるものは是れ豈に彼が吾人は自由  
 を予へたる無量の愛と無限の睿智とを實地は證明したるものに非ず  
 や斯くても猶誰か造物主を其の吾人に自由を予へたりとて罪するも  
 のあらんや凡ての人を偽とするも神を眞とすべし(羅馬三の四)各人宜  
 く救を得んことを努め宜く戦ふて勝つべしされど傲慢せず造物主を  
 不仁無智に罪する毋れ至仁の神を誹謗する毋れ宜く愛の道に進歩し

益々高く夫の自由なくんば達すること能はざる靈徳の階段は昇るべ  
 し天に在す爾曹の父の完全さが如く爾曹も完全なるべし(馬太五の  
 四十八)

○生命と死の原因善と罪疾病と健康とは吾人の体中畢生相戦ふ死  
 の因は久しく生命の元は蹂躪せらるゝも遂之は勝を制す何となれ  
 ば吾人の肉体は五行的有罪的にして己れの裡に生命の元を有せず靈  
 魂—罪は由りて自ら死の因を多々有する所の靈魂—より之を受くる  
 のみよして靈魂其者伏在する死の因は抵抗するほどの力なければ  
 なり加之内の人には外部の腐朽する故に因りて改新す警醒常に勞して  
 倦まざるの靈は遂に己の作用の力を以て軟弱にして朽壞すべき肉体

を破壊す。且夫れ身体の遺傳病は時を経るに従て益々増長し亦以て身体の機關を破壊す。此の如く人間の斯世に於ける生命は日々漸々衰滅するものなり。吾人の情慾は如何彼等が吾人の健康を害する何ぞそれ甚しきや。若し夫れ不節制の如き將た飲食睡眠娛樂に秩序なきが如きに至りては如何其の身体を破壊する最も甚し。若し果して此の如く吾人の肉体は常に破壊し見るく亡滅に近づくとせん。吾人は之を過ぎ去るものとして蔑視し宜く不死の靈の爲に全力を竭すべし。身体は不確固にして過ぎ去るの友なり。

○吾人は我が屬神的生命の昇降を示す確かなる驗壓器あり。心即ち是なり。又これを稱して吾人が此の屬神的生命の海を航海するに當りて

指南とすべき羅針儀とも名づくるを得べし。彼は吾人の往く所即ち東方靈界——ハリストスなるか或は西の方——死の權を掌握する暗國——魔鬼なるかを示す。只宜しく此の羅針儀に目を注ぐべし。彼は吾人を欺かずして眞誠の道を示すなり。我儕が心自ら責むることなくば神に向ひて憚る所なかるべし。約翰第一書三の廿二即ち東に近づくを謂ふなり。

○凡そ人の好む所人の嗜む所のものは必ずこれを得べし。此の世のものを愛せんか彼乃ち之を得て此の俗世的のものは其心は棲み込み俗世的の性質を賦して之を束縛す。在天のものを愛せんか彼乃ち之を得在天的のもの其心裡は棲み込みて施生的に彼に影響せん。此の世のもの

のは其の何たるを問はず之に吾人の心を傾注すべからず何となれば凡そ此の世のものよは吾人苟も節度なく戀々として之を利用するときは神に對する無限の抵抗を以て自ら俗化したる惡鬼混じ居るが如くなるを以てなり。

○神にして人の凡ての意思希望思想言行に在らんか即ち神の國之に臨みたるなり然るときは彼は万事に於て——思想界に於て實行界に於て物質界に於て神を睹神の在らざる所なき所以彼の爲め益々明白となり神を畏敬する念其心に起り造次顛沛も神に悦ばれんことを努めその右に在すの神に對して罪を犯さんことを恐るゝの念瞬間も止む時なし願くは爾の國來らんことを。

○汝の心の目何を視るか神及び來世の生命と此の世の外にありて光明赫赫たる在天の幸福なる能力と天に遷りたるの諸聖人に向ふか將又此の世の幸福なる飲食衣服住宅と罪に溺るゝの人々及び其の虛空的事業とを傾くか請ふ汝自ら屢々之を驗せよア、吾人の日常に神に向ひたらんよは其の幸福如何ぞや！而も吾人は只窮困災厄に際してのみ己の目を主に向け幸福の時よは吾人の目此の世と其の虛空的事業とを向ふを奈何せん汝或は云はん此の主を仰ぎ視ることは我に何の益を予ふるか他なし汝の心よ深き平和と安穩とを予へ汝の智に光を予へ汝の意旨に神聖の熱心を予へ汝をして敵の網より免れしむべしダウカードは我が日常に主を仰ぐと云ひ其の原因を述べて其の我



が足を網より救ひ出すに因ると云へり(聖詠廿四の十五)主は平安を心を彼に歸する者に謂はんとす(同上八十四の九)。

○汝若し聖書に記する所の人物若くは事件の眞偽を疑はば使徒の云ふが如く聖書は悉く神の默示に係り(提摩前三の十六)即ち悉く眞實にして假想的の人物なく、妄誕無稽の説なきを記憶せよ、只實説よあらずして譬喩を述ぶる所あるも、人皆固より其の譬喩的の談たるを知らん神の言は悉く唯一の完全なる不分割の眞理なるを以て、汝若し何等かの一説一言を以て詐偽と認めたらんは、汝は聖書全体の眞理に對して罪を犯すなり而して其の最初の眞理は神其者なり、主曰く我は眞理なりと(約翰十四の六)、イエススハリストス神父に謂て曰く爾の言は眞

理なりと同上十七の十七、されば汝は聖書を以て悉く眞理と見做し、其の言ふ所の事は果して其の言ふ所の如く有りしもの若くは有るものなりと思ふべし。

○隣に對する暗黒嫉惡の心情に壓服せらるゝ勿れ、即ち宜しく之を制して健全なる知識の光に由り信の力を以て之を根絶せよ、然らば汝は快然たらん、我玷なくして行けり(聖詠廿五の二)斯る感情は往々心裡よ起ることあり、之を制することを知らざる者は、濫面齟屈として自ら快快として何人も亦見て不快となす、其の情起る時は強て自ら精神を發揮し、愉快の事、無邪氣なる遊戯を事とせよ、然らば惡感情は煙の如く飛散すべし。——是れ實驗なり。

○吾人の罪よて傷害せられたる天性に、時として其の恩恵を施したる人を嫉悪し、その恩恵の爲め不良の感情を以て之に酬ゆる如き奇怪の現象起ることあり。嗚呼吾人の心何ぞ狹隘にして愛と慈悲と乏しきや！嗚呼何ぞ自愛心の深き此の如くなるや！敵は太く吾人を嘲笑し彼は吾人の善行の結果を絶滅せんとす。されど汝は汝より恵を受くる者は、他日亦汝の爲め汝が神の矜恤を蒙むるの聘質と爲らんとするを知りて、恩恵を施すこと多きよ。從て益々深く之を愛せよ。

○主若くは神の至淨の母、若くは天使、若くは聖人よ求むるよ。當りては、夫のカヘルナウム百夫長の有せし如き信(路加七の六以下參看)を有すること必要なり。彼れ百夫長は部下の兵卒が彼に聽從し彼れの命よ從

て行ひたる如く、至仁なる主の全能の言よ依らば無論彼の願望成るべしと信じたり。若し夫れ造物は己の限りある能力を以て、彼の求むる所のものを遂行したりとせんよ。は、主宰たる者豈よ自ら己の全能を以て、信と望とを懷きて之に依頼する僕の願を成就せざらんや。恩寵と神に對する轉達とよて有力なる忠義の僕——神の至淨なる母と天使及び諸聖人も亦豈よ信と望と愛とを以て捧ぐる吾人の願を成就せざらんや。實よ予も百夫長と共に若し當然よ神聖なることを求むるよ。於ては我よ之を與へよと云へば彼之を賜ひ我よ來りて助けよと云へば彼必ず來り、之を爲せよと云へば彼必ず之を成さんとするを信す。須らく斯る單純有力の信を有せざるべからず。

○凡そ虚偽の思想は思想其の者も虚偽の證を有す心も取りて死の因と爲ること即ち其の證なり、肉体の念は死なり、羅馬八の六之と同じく凡そ眞誠の思想も思想其の者も眞誠の證を有す心に取りて生命の因となること即ち其の證なり、使徒曰く靈のことの念は生命なり、平安なり(同上)。

○劍爾が心を刺透すべしこれ衆の心の念の露れんが爲めなり(路加二の三十五)曾て此の言の如く十分神の母は應驗し今亦善良敬神の人に應驗し劍は彼等の心を刺透して之に接觸する人々の心の念を暴露せんとす即ち主は時として彼等を己の心中に多くの惡を包蔵するも之を露はさる人々を對し之をして知らず識らず内心の惡の溢る

るよ由り口外せしめ而して其の惡をして不淨不潔なる濁流若しくは大河の如く彼等の口より流れ出さしむることあり是は於てか彼等は始めて人間の名稱は適應せざる事を行ひ世人始めて曩は智者識者尊敬すべき人と見做したる所の人々(即ち古今の士師及び「ファリセイ人」の果して如何なる人物たるかを判知するなり)。

○願くは爾の國來らんことを「言は生命の國來らんことをどなり、何となれば今多くは死の權の掌握者——魔鬼の權下は屬する死の國繼續すればなり、此世は於て神の國は如何せば人々臨むべきか、他なし、赤心の悔改は依るなり、悔改めよ、天國は遁けり、馬太三の二不敬虔の徒は須らくその思想を棄つべく、貪婪者は須らくその利慾を棄つべく、欺騙者

は須らくその欺騙を棄つべく、沈湎者は須らく飲酒を廢すべく、饕餮者は須らくその食慾を節すべく、荒淫者は須らくその淫行を絶つべく、驕傲者は須らくその高慢を去るべく、虚名を逐ふ者は須らくその名譽心を一擲すべく、嫉妬家と壓くことを知らざるの徒は須らくその嫉妬と壓くことを知らざるの慾を棄つべく、性急の人及び不平を鳴らすの輩は須らくその不忍耐と不平とを去り、人皆ハリストス教的の愛の所爲就中強からざる者の懦弱を負ふ(羅馬十五の一)ことを學ぶべし。

○表面の祈禱は往々心理の祈禱の故より由りて成り、心理の祈禱は表面の祈禱の故より由りて成ることあり、即ち我若し口よて祈禱し又は誦經するときは多くの言は我が心よ入らず、我は貳心を懷き偽善を行ひ口

よ言ふ所心よ思ふ所と齟齬し、口は眞理を唱ふるも心情その祈禱の言と符合せざることあり、而も我若し内心よて祈禱するときは意を祈禱の文句よ注がす其意味と精神とに集中し心をして漸次眞理よ向はしめ、以て祈禱文の録されたる精神に徹底し此の如くよして永遠の眞理(神)の言よ循ひ漸々靈と眞とを以て祈禱するの習慣を作るに至るなり

曰く神を拜する者は靈と眞とを以て之を拜すべし(約翰四の廿四)人、表面的は高聲祈禱する時は常に必ずしも活動の頗る繁激なる心中の動靜を偵察する能はず、勢ひ發音と文句との外形よのみ汲々たらざるを得ざることあり、是を以て夫の口早よ誦讀する誦經者の祈禱の如き多くは全く偽善の祈禱と爲るなり、彼等の口を看れば恰も祈禱する如く

敬虔なる人の如く見ゆると雖も心は睡りて其の口の言ふ所の何たる  
を知らざるなり。是れ彼等が急ぎて心中よその言ふ所を熟慮せざるに  
依るなり。彼等が我等の爲に祈る如く、吾人も亦須らく彼等の爲に祈ら  
ざるべからず。彼等の言が彼等の心中よ貫徹し温情を以て其言を發せ  
んことを祈ること必要なり。彼等は聖人の言を以て吾人の爲に祈り、而  
して吾人は彼等の爲に祈るべきなり。

○吾人は意思と言と行とを以て罪を犯す。吾人苟も至聖三者の純乎た  
る像と爲らんとせば、己の意思及び言行の神聖ならんことを努めざる  
べからず。意思は神父よ適し、言は子よ適し、行は萬事の完成者たる聖神  
よ適應す。意思よ於て犯す所の罪は、ハリスティアニシよ取りて輕視すべ

きものよ非ず、エギベトの聖マカリイの説よ依るよ、吾人の神よ悦ばる  
る所以のもの。意思よありて存すればなり、何となれば意思は本原にし  
て言と行は之れよりして出るものなればなり、其故は言は或は聽く者  
をして恩寵に浴せしめ、或は猥褻と爲りて他人の誘惑と爲り、他人の意  
思心情を壞傷することあり、行よ至りては其實例人をして之に則らし  
めんとし人を感動すること更に強きを以て亦言ふを待たざるなり  
○汝の主は愛なり、汝宜く彼を愛し、彼よ於て衆人をハリストスに於け  
る彼れの諸子として之を愛せよ。汝の主は火なり、汝は心冷淡ならず、乃  
ち宜く信と愛とを以て燃えよ。汝の主は光なり、汝は暗中を歩む事なく  
何事たりとも考慮することなく、若くは信仰なく、智識の幽暗よ於て行

ふ勿れ汝の主は矜恤鴻仁の主なり汝も須らく隣の爲に矜恤鴻仁の原  
と爲れ汝若し此の如く行はば永遠の榮を以て救を得ん。

○凡そ躁急に心中より了解感覺なくして祈禱を唱ひ己の懶くして睡眠  
を貪るの肉體に制せらるゝ者は神に事ふるものに非ず乃ち己の肉體  
と自愛心とに事ふるものにして己の不注意と祈禱に心を傾けざると  
よ由りて主を嘲るゝ等し蓋し神は靈なれば神を拜する者も亦靈と眞  
を以て之を拜せざるべからず(約翰四の廿四參照)即ち偽善を以てすべ  
からず汝の肉體は如何に懶くして如何に衰弱し如何に汝を睡眠に誘  
ふも須らく自ら制して神の爲に己を惜まらず己を棄て汝の献物を以て  
神の爲に完全と爲し汝の心を神に献げよ。

○天は神の光榮を傳へ穹蒼はその手の作る所を語ぐ日は日と言を宣  
べ夜は夜に智を施す(聖詠十八の二三)夫れ此の如く天の黙々として而  
も明々白々も其の神に創造せられたるを傳ふことは吾人にも達し  
て今や此宣傳を解せざる言語あるなし神の子の藉身せし時よりして  
福音經聖教會福音の弘布者機密及び祈禱の執行者たる牧師誦經者唱  
歌者の聲鐘聲等は皆是れ今日神の光榮と彼れの人類に對する愛の榮  
并に創造の光榮を傳ふるものたり蒼々たる天と燦爛たる星宿の傳道  
も亦蓋し其一に數へらるべし然れども活言を以てするの傳道は更  
生々活潑にして了解し易く人を感動する最も深し至地及び地上の有  
らゆる萬物も亦皆神の光榮を傳ふ。

○家事にせよ職務上の事よせよ如何なる事を爲すよ於ても汝の力汝の智汝の成効はハリストスと彼れの十字架なるを忘るゝ勿れ故に凡そ事を始むるに當り必ず主を顧びてイエス我を助けよイエス我を照せよと唱ふるを怠る勿れ斯くせばハリストスよ對する汝等の活信と望とは汝等の心中よ維持燃起せられん蓋し彼れの能力と光榮は世々よ存すればなり。

○凡そハリステイアニンは宜く慎で造次顛沛も汝の無形の生命汝の安慰汝の光汝の力汝の呼吸たる者——即ちハリストスイイスに對する信仰を失ふ毋れ汝の心頭と爲り暗昧と爲り不信と爲り飲食の爲め斯世の娛樂の爲め冷淡と爲り遂には汝智にて生活して心にて生活せ

ず智を鍊修して心は之を蔑如し網をば擴張修飾して漁夫其者は之を窮困よ苦ましむることあらば——蓋し心は之を比較的よ云へば漁夫よして理性は漁夫の網なり——汝の心よ信を措く毋れ。

○肉體の安逸悠々快々たるときは肉體は其慾及び惡癖と共に生氣滿満として其の窮迫苦惱疲困するときは慾と共に死す是を以て天父の睿智仁慈なる吾人の靈魂と肉體をして至難の憂悲と疾病に罹らしむることあり故に吾人は雷よ毅然として憂悲と疾病とを甘受すべきのみならず靈魂の安逸悠々として肉體の健全なる情態の時よりも之を以て更よ快とせざるべからず何となれば靈魂の悲みと肉體の病よ罹らざる——就中斯世の幸福饒なる時に於て——人の精神の情態の更に惡

しきこと論を俟たざればなり此の如き人の心は知らず識らず己より罪と怨の有らゆる種類を簇生して其人を精神的の死に付するなり。

○汝須らく主が各ハリスティアニンは在りど記臆せよ人汝に來るときは常之の深き尊敬を施すべし何となれば主は彼に在り彼に由りて屢々己の旨を表顯すればなり神は我儕の衷に作用し我儕をしてその善旨(即ち神の善旨)に循ひて志を立て事を行はしむ(腓立比二の十三)兄弟の爲めは恰も主の爲にするが如く何事をも惜む勿れ況んや汝は主が何人より由りて汝に臨まんとするを知らざるに於てをや何人より對しても偏私することなく衆人より對して善良なれ誠實なれ快然たれ汝須らく主が時として亦不信者に由りて吾人より其旨を告げ又は彼等を

して其心を吾人より向はしむること會てエギペトに於て主が獄卒をして其心をイオシフに向はしめたる如きこと(出埃三十九の廿一)あるを記臆せよ。

○我が心の安慰は天に在り靈界に在りて塵世にあらざる物質界にあらざる主よ我をして常に天のことを想はしめ全く塵世の思想を放棄せしめよ我爾の仁慈を恃む我目を擧げて山を望む我が助は彼處より來らん(聖詠百二十の一)。

○人間の言語は人の智と心とに在る所のものを表顯し(即ち見る可らざる主能たる創造力の智を表顯す)而して智若くは思想を表顯する所の言語より由りて呼吸人より出づ神言が吾人に萬物を創造したる至大



の智なる父を表顯し而して此の神言より至上者の能(至上者の能)爾を庇はん路加一の卅五なる施生的の聖神の永遠父より出で、人に表顯するも亦稍之に似たり是に於てか救主の言釋然たり曰く父の外より子を識る者なく子及び子の顯す所の者の外より父を識る者なしと馬太十一の廿七汝それ之を知るか子獨り人々より父を顯すこと恰も吾人の言が心中に秘する吾人の意思を表顯するに等し父と子の密接に相一致することとそれは是の如し而して各個位に其權能あり各その務あり故に救主使徒に謂て曰く我若し往かずは保惠師爾曹より來らず若し往かば彼を爾曹より遣さんと(約翰十六の七)吾人より聖三者——父と子と聖神の機密を吾人に啓示したる神の子より光榮は爾より歸す爾の言は眞

實なり吾人は爾の悉くの言と箇々の言より生活す爾の言は吾人の樂なり安慰なり生命なり就中保惠師の言然りとす。  
 ○保惠師たる聖神を疑はずして顧ぶことと慣れよ彼れ保惠師は汝の善く知る所なり汝は屢々彼を聖賜し顧び彼は汝の祈禱に由りて常に必ず間斷なく之を變化し而して汝は自ら屢々彼れの神の作用の結果を實驗す。  
 ○深く慎みて己の泥製の器なる心中に聖神の寶其腹より活る水の川(約翰七の三十八)を保存すること必要なり能く己の心より警醒を加へ溫柔を守り忿激と自愛の感情と此世に戀々たるの情と肉体の不淨の慾念とを制すべし然らざれば聖神の價すべからざる寶は忽ち吾人を棄て

ん、即ち心と意思の自由の上、翩翩たる非常、輕快なる天使的の靈魂の感情安和と喜悅とは忽然心の裡より消え去りて、これまで滔々として流れ靈魂の溝を充したる活水の川も涸渴し、而して他の火來りて靈魂に充溢し息苦しく心裡を燃立て之をして安和と喜悅とを失はしめ憂悲懊惱の情を以て之に充たし忿激と誹毀とを教唆するに至らん、吾人の心裡に神の國と敵の國、生命の國と死の國の認知交代せらるゝの顯然たること此の如し、ハリストニアニは内心の目よて之を見神の公義と神聖とを驚嘆し又夫の吼ゆる獅子の如く常々徧行て呑むべき者を尋ぬる(彼得前五の八)敵の片時も倦まざるにも驚嘆す。

○神父は生命神子も生命神聖神も亦生命として聖三者即ち生命なり

生命は父及び子及び聖神の名にありて存す、汝心よて父を排せんか即ち汝の心の生命を斥けん、子を排せんか即ち己の生命を斥けん、聖神を排せんか即ち己の生命を疑は汝の心に反響して死と爲り憂愁と爲り煩悶と爲るも神は依然三位に於て生命の神たり、汝心中の疑を排して全心を以て凡ての三位を神と認め己の生命と確認せば生命再び汝の心に入らん、三位に於て崇拜せらるゝの神は神其者に於て「アミン」たるなり(哥林後一の二十)。

○神聖なる著書を読み若くは之を聞く時は之を著述したる人々の内、彼等より其旨を諒す所の神言の像若くは神言其者を誠實敬へよ凡そ宗教的の書若くは世俗的の書を読む時は常に人は神の像として

此の神の像は彼れの思想と彼が言ふ所の言と精神と在りて記憶せよ。凡そ常一人を見る毎に恰も神の像の如く深く之を尊敬するの習慣を作るべきは勿論なりと雖も、就中其人の言ふ時殊に神のことと就て言ふ時之を尊敬すべし然るとき始て神聖の人たるべし。吾人は人々を見慣るゝより人々と交際しその日常の生活を熟知するより又己れと人々の有する言の賜に慣るゝより言の賜を貴ぶこと甚だ浅く甚しきは時として他人の有する此賜を蔑視することあり、此の如くにして魔鬼は吾人の自愛心と不注意と乗じて人々の内は神の像を誹毀す、吾人は須らく心を謙遜として己の傲慢の智を挫折し夫の預言者を以て單に詠歌者の如く見做したる預言者時代の人々等しき者と爲らざらん

んことを努めざるべからず、彼等は預言者の命を遵奉するを欲せず、反て之を蔑視し之を窘逐し毆打殺害したり、吾人は須らく己の故郷に於て預言者を重んぜざる(路加四の廿四)如き人々の類に倣はざらんことを努めざるべからず、如何に卑賤微々たる如く見ゆる人にと雖も、汝は須らく彼の衷に神の像を尊ぶべし、就中彼が愛を以て言ふ時殊に愛の事を言ひ、愛の事を行ふ時尊ぶべし。

○汝は假し聖三者のこの書を著したりとし、而して之を千部乃至汝の欲するだけの部数を印刷したりとせん、此の幾千部の書たる管に其精神同一なるのみならず、言も同一にして形状も同一ならん、ハリストスの体の奉獻も亦猶是の如し、天下の勝て敷ふべからざる多くの聖堂

に於て献げらるゝものは一の体ハリストス教の聖堂の總ての祭壇に於て作用する所のものは同一の聖三者凡ての羔羊に於て同一のハリストスとその神あるのみ(猶書籍に於ける趣旨の如し)として到る處奉獻の式相同じ即ち此の至聖なる機密は恰も主の人類に垂るゝ愛の一大聖書にして同一の深愛の神世の罪を己れに荷ひたるハリストスの神を罩め同一の形を以て數限りなく世界到る處に於て製せらるゝもの如し又他の例を擧げて云はんか此世の箇々の人間や何ぞ夫れ多き而も其体形皆同じく其靈魂も亦相等しく之が才能相等しからざるも悉く同一なり之を稱して人間と云ふ萬民恰も一人の如くとして皆一原より出でたり即ち初めは神父と子と其神より出で而して後一の配

偶者より出でたり故に神の誠は鄰を吾人の天性の一樣なる故に因り己の如く愛すべきを命ず斯く人間多きも彼等は靈身の天性の一樣なるよ由りて惟一なり主も亦是の如く施生的の機密に於ては其何處に於て献げらるゝと拘はらず一の血脈より出でし全人類行傳十七の廿六の永遠に惟一分つべからざるの造者なり彼は世界到る處の聖堂に於て行はるゝ体血の機密に住する己の惟一の神よ由りて曾て罪を犯し魔鬼に服従するを以て彼どの体合を絶ちたるの吾人を己と体合せしめ且つ凡そ吾人をして彼と隔離し又相互に乖離せしむべきものは悉く之を根絶一掃せんと欲するなり彼等皆一よならん父よ爾我に居り我爾に居る如く彼等をして亦我儕にをりて一と爲らしめよ(約翰十

七の廿二領聖機密の目的それ此の如し。

○麵包と葡萄酒とはハリストスの体血となり、ハリストスは恰も靈魂の身体に宿る如く、其中に居ると云ふも何ぞ怪むに足らん。夫の魔鬼が赤兒の微々たる芽心は巢を作り、身体の生長すると共に増長して後、小兒が其心に隠れて巢籠れる魔鬼と共にして世に出づるが如きも亦何ぞ怪むに足らん。主が吾人己の至淨なる体血を賜ひ、ハリステアニンをして罪と死との權を掌握する(希伯來二の十四)魔鬼の巢籠れる心の裡に之を受けしめ、之が解毒劑として以て吾人成聖と生命とを予へ罪と死とを逐ふことよ於て主の仁慈睿智の現はること實に無限なりと云ふべし。吾人の心は魔鬼及び諸罪の屢々巢籠ることの疑ふべから

ざる如く、吾人の聖物、施生者ハリストスの吾人の心は宿ることも亦疑ひなし。吾人の主は魔鬼よりも大なり。魔鬼若し吾人の此世の事物を戀戀たるに乗じ、吾人の心に入りて作爲する所ありとせんよは、ハリストス安んぞ信と悔改とよ由りて之に入らざらんや、況んや心の造られたる所以、神の殿たるべきよ於てをや、吾人の心は吾人の心靈的なる併せて肉体的なるに應じ、彼れの体血と爲るよ於て彼れ安んぞ之よ入らざらんや、更よ一例を擧げて云はんか、魔鬼若し獸の像に生氣と言とを予ふるを得る(黙示録十三の十五)とせんよは、ハリストス安んぞ麵包と葡萄酒の裡に居り之を化して体血と爲し、全く自己のものとする能はずとせんや。

○火鏡が木若くは紙若くは其他可燃質のものを焼くは吾人が之を物の上より指向け火鏡の焼點より集中したる光線をしてその焼かるべき物の一點より集中せしめ之より總合の全力を注ぎ恰も太陽全体の形を縮少して其物より込め入れたる如くする時より在り祈禱より於ても亦猶是の如く吾人が恰も火鏡を以てするが如く己の智を以て吾人の心靈的燒點たる心より無形の太陽たる神を指向け而して此の太陽之より其全能力を注ぐときは吾人の靈魂は無形の太陽より暖められ生々活潑と爲りて燃え起つなり神母天使諸聖人より對しても亦然り彼等の像を彼等の有りての儘よりその全力と聖徳と共に己の心より指向けよ然らば汝の心は十分より彼等の光照を受けて恰も火の如き彼等の愛深き作用より燃起ち

彼等の潔白神聖仁慈勢力は汝の心に傳はりて心自ら清潔と爲り自ら信と愛とより堅り己の心を斷乎として易ることなく神と彼れの諸聖人より向くること久しければ久しきは汝の心は更より善く照され善く清められて益々生々活潑と爲るべし。

○聖人を顧ぶに當りて其の己れより近きと己れの言ふ所を聞き納るゝことより疑を挟み汝の心懊惱たる時は乃ち己を裂けよ即ち直より主イ、ス、ハリストスの佑助より由りて心中より巢籠れる讒者(魔鬼)に勝ち聖人は聖神より於て汝より近く汝の祈禱を聴納ると確信して之を顧べよ然らば汝の心忽ち快潤たらん祈禱より於て心の重々しく且つ疲勞を感ずるは吾人の心の不誠實なると詐偽狡猾なるとより由るものにして恰も吾

人が通例人と談話するに當り之と語るに赤心を以てせず不誠實不親切を以てする時心中爽快たらざるに等し汝刺ある鞭を蹴ること難し(行傳廿六の十四)汝は常より到る處心よて誠實なれ然らば常より到る處心よ平安を保たんとされど就中神及び諸聖人との談話よ於て誠實なるべし蓋し神(靈)は眞なればなり(約翰第一書五の六)。

○祈禱の時よは一語毎に心中其語よ包含する勢力を以て發言するに猶彼の藥劑が常より各造物主より之よ賦せられたる醫治の効力を以て服せらるゝが如くすべし若し藥劑よしてその効力若くは精氣を失ふ時は効を奏せずして徒ら齒が浮くのみ祈禱よ於ても亦猶是の如く言語よ勢力を付せず心よて其眞理を感せずして發言する時は吾人は

其の祈禱よ由りて利益を得ざるべし何となれば眞誠有効の祈禱は靈と眞とよあればなり祈禱の言は各己の効力を有して共よ身体のため醫治の分量となる藥劑の部分若くは種類よ同じ藥劑師が藥劑を瓶若くは其他の器物よ密封して其の香氣ある部分の効力を保存する如く吾人も言語の勢力を器物よ入るゝ如く心中よ堅く保存して之よ適應する勢力を以てするに非ざれば決して之を發すべからず。

○祈禱するに當りては總ての受造物を神の前よ對して有る無きが如きものと見做し獨り神を以て萬物を水の滴の如く包羅して在らざる所なく有らゆる萬物よ作用を及ぼし萬物よ生を施す者と想像すべし○祈禱は此世の旅人羈寓者たるハリステアニンなる人を靈界人は即

ち其一員たりと就中生命の源なる神と結合せしむる金の鎖なり、靈魂は神より出で又祈禱に由りて常ニ神ニ就ク、祈禱する者は祈禱ニ由りて得る所の利益や頗る大なり、祈禱は靈魂と肉体とを安らかよし、且つ常ニ祈禱する其人の靈魂を安らかよするのみならず、此世を逝りし我等の祖先父母兄弟の靈魂をも安らかよすること屢々これあり、視よ祈禱の至緊至要なる夫れ是の如し。

○腐敗の焚燃(死)ニ罹りたる肉身より靈魂の出づるは猶燃ゆる木より煙の空中ニ登る如し。

○人々に在る良心は人間の心の裡ニ歩む在らざる所なき神の聲ニ外ならず、主は萬物を造り獨り常ニ有る者なるを以て萬物を知ること恰

も己を知るが如くよしして、人々の現在過去未來の意思希望思想言行一として知らざるなし、我は己の思想己の想像を以て如何ニ疾驅するも彼は我ニ先だちて彼處ニ在り、我は常ニ彼を避くることなく、彼ニ在りて己の事を行ひ常ニ彼を以て我が途の證者と爲す、彼れの目は人の諸子の途を鑒む(耶利米卅二の十九)我安くに往て爾の神を避けんや、安くは走りて爾の顔を逃れんや(聖詠百卅八の七)。

○茲ニ生ける人あり、其目吾人ニ傾注し、其耳啓きて吾人の言ふ所を聽かんとし、其肉体と靈魂とは吾人の前ニ在り、されど肉体は吾人を見らるも靈魂は見るべからず、即ち彼れの思想彼れの希望彼れの志は吾人此を見見る能はず、而も一瞬時として彼れの靈魂の思想せず、其の相應の



状態よて生活せざる時なきなり。有形の森羅万象神の美なる世界も亦猶是の如く吾人の前、吾人の周圍、吾人の裡あり而して吾人は之に於て到る處生命と秩序との創立者を見ず工匠を見ず而も彼は凡ての時凡ての處に在ること猶靈魂の肉体に在る如し但し之は限らるゝに非ず、彼は完全睿智至仁全知全能無所不在の神として一瞬間たりとも思想せざることなく己の造物は仁慈睿智を注がざることあるなく一瞬間たりとも己の睿智全能の事業は工を施さざることあるなし、何となれば神は自ら動作し窮りなく物を生ずる者なればなり、されば汝世界を見るも彼に於て到る處其創造者たる神を見到る處在らざるなく、萬物は充滿して萬物も動作し萬物を整頓する神あるを認めよ。

○各人の良心は是れ萬民を照す惟一靈妙の太陽なる神の光線なり、主神は良心より公義全能の王として萬民を統御す、彼れの良心を經て顯はす所の権力何ぞ夫れ強大なるや、何人とも雖も全く彼れ良心の聲を打消す能はず、彼は不公平なく神自らの聲として衆人及び各人は直言す吾人は良心よりて神の前一人の如し故に十誠の言ふ所恰も一人に對する如し曰く吾は爾の主神なり、爾他の神を奉ずる母れ……(爾)偶像を造る母れ……(爾)徒らに稱ふる母れ……(爾)安息日を記臆せよ……(爾)爾の父母を敬へ……(爾)殺す母れ淫する母れ盜む母れ妄證する母れ……貪る母れ、出埃及廿の一至七又曰く爾心を盡して爾の神を愛せよ又鄰を愛する己の如くせよ、馬可十二の三十、三十一何となれば彼は

全く我と同じければなり。

○平和の繫は於て力めて靈の一致を守るべし(以弗所四の三大なる哉  
此誠!之を實行すること必要なり。靈の一致を守るべし。神の子も常  
之を希望し曾て父に向て之を祈り今又之を希望し之を祈りつゝある  
なり。彼れ門徒の爲に祈りて曰く聖なる父よ爾の我に賜ひし者を爾の  
名に託して守り彼等をも我儕の如く一になし給へ……我た彼等の  
爲に祈るのみならず彼等の言に因りて我を信する者の爲にも祈るな  
り此は皆一にならん爲め且世をして爾の我を遣はししことを知らし  
めん爲なりと(約翰十七の十一、廿、廿一)視よ吾人が靈よ由り生命よ由り  
て一たることは我が宗教の創立者主イエススハリストスの神性も亦

公々然之を證するよ非ずや衆人を合して恰も一靈の如くならしめん  
と欲し且之を實行する者は則ち萬物を造り萬物を己の下に合し且つ  
不順よ由りて一致を破りたる者をも信仰と聽従よ由りて再び己と合  
体せしめんと欲する惟一の神より出てたるや明かなり神より來らす  
其召を蒙らす之は遣はされざるの師は(彼等は我遣はさるるよ趨る  
耶利米廿三の廿一)此尊貴はア—ロンの如く神の召を蒙りたる者よ非  
ざれば自ら之を取る者なし(希伯來五の四)常よ人間社會よ分裂を醸  
し紛争を起し之を以て自ら明し其の神より遣はされざるを證す路得  
も是岐教の主唱者も是異端者も皆是也彼等は惟一のハリストス教會  
を裂き教會の惟一の首ハリストスの下に合し惟一の神の神にて活動

せらるゝ分割すべからざる無数の單位を分割し之を以て彼等自ら主  
 の羊を分裂散亂せんことのみを是れ勉むる魔鬼の具たるを證せり狼  
 羊を奪ひて之を散す(約翰十の十二)榮すべき哉ハリストス正教常其  
 誠實の結果たるものは信者をして愛と心靈的及び物質的の幸福を共  
 むするよ由りて互よ一致せしむること是なりハリステアニンが其教  
 の本旨よ遠ざかること甚しければ甚しきだけ益々利己心よて分裂し  
 益々深く己の裡にのみ籠り心靈的及び物質的の幸福を共よすること  
 薄く—就中物質的の幸福を貧者と共よすること薄く愛情涸渇して人  
 情益々薄らぐなり真正のハリストス教こそ此世よ幸福を扶殖するも  
 のなれ何となれば彼はハリステアニンを以て一箇の大なる身體と見

做し之よ天性に由らず位置と事業とよ由りて高貴なる肢と高貴なら  
 ざる肢あり強者と弱者富者と貧者ありとし聖神は強者若くは富者の  
 靈魂よ其の心靈的及び物質的の幸福を共にするを以て弱者若くは貧  
 者に助くべきことを諷示すればなり信者は皆心を一よし意を一よし  
 たり(行傳四の三十三)。  
 ○無慈悲怨恨若くは嫉妬等は「ハリステアニン」の間よ其名をさへ存す  
 べからざるものなり無慈悲豈よ「ハリステアニン」の間よわり得べきも  
 のならんや汝は到る處に愛を見到る處よ愛の香を聞かん吾人の神は  
 愛にして彼れの國は愛の國なり彼は吾人を愛するよりして吾人の爲  
 よ己の獨生子を惜まず吾人の爲よ之を死し付したり汝は又家よ在り

て家人に愛あるを見ん何となれば彼等は洗禮及び傳膏に於て愛の十字架にて印せられ十字架を戴き聖堂に於て汝と共に愛の晩餐を食すればなり聖堂に於ては十字架と云ひ十字架の記號と云ひ神と人と一對する愛よて神の悦ぶ所と爲りたる聖人と云ひ藉身したる愛其者神の子基督と云ひ見るものとして愛の記號ならざるなし天よも地よも到る處として愛あらざるなし愛は人の心を慰め之を樂ましむること恰も神の如く而も怨恨は靈魂と肉體とを殺すなり故に汝も常に到る處愛を顯すべし汝は到る處に愛の傳道を聞き兇殺者魔鬼のみ獨り永遠の怨恨なるに汝夫れ猶愛せざるか。

○己の子を惜まざる者豈に彼と共に併て萬物をも我儕に賜はざらんや(羅

馬八の卅二既に至大至要のものは賜はりたり其他のものは其の求むる所何物たるに拘はらず無論神の子よりも小なり故に凡そ思想し得るはどの幸福は皆安心してイエススハリストスの名に依り神に求むるを得べし爾曹すべて我名に託て求むる所のものは我之を成さん父の榮の子に因りて顯はれんが爲めなり約翰十四の十三汝は永眠者の爲に罪の赦と安慰とを求むるか彼は徧く世の爲めの挽回の祭物なり(約翰一書二の二)彼れの血はすべて罪より我儕を潔む(同上)の七彼は又永眠者よも其の或は言と行と或は意思よて犯せし悉くの罪を赦すを得べし「彼は己の眠りし僕の復活と生命と安樂なり」……汝は生ける人々と己れども幸福を求むるか彼曰く願ふ所のものあらば求めよ予

へられん(約翰十七の五)

○在天の星宿の數の主は知らるゝ如く在天の天使の數と其意思の數も亦彼れの知る所たり海の眞砂の數と全地の砂及び造物の數が其機能及部分と共に大より極て小なるに至るまで彼れ知らるゝ如く又凡ての元素の極微分子の數の彼れ知らるゝ如く全人類の過去現在未來の數過去現在未來の悉くの人間の思想の數その有らゆる心中の動作言行の數も彼れの知る所たり有形世界に於て一も彼れより隠るゝものなく極微分子と雖も盡滅せざる如く—何となれば神は由りて存在を受けたる者神に依らず神の旨なくして絶滅すること能はざればなり—靈界に於ても一の意思一の思想一の心中の動作一の希望一の行

爲たりとも神の爲に盡滅することなく悉く其庫の中は數のまゝ量のまゝ一即ち告解若くは品行の矯正にて塗抹せられたる不良の意思希望言行の外その會て有りしまゝの數と程度と勢力に於て保存せらる世界の極微分子と此世の造物の極微分子の數は此事に關して人間の靈魂の意思動作の數と全く正比例を爲す若し夫れ創造せられたるもの器械的のもの自ら死すべきものとして盡滅せすとせんは自ら神より造作の能を受けたるもの主宰たるべきもの有生のもの即ち言語も其形を變したるの意思及び意思の本原たる靈魂豈絶滅せんや夫れ是の如く絶滅する能はずとせんには汝死すべき人々も宜く答辨の覺悟を爲せ汝等が此地より彼處に送りたる汝等の有らゆる善惡の意思

希望言行はその善なるものは勿論その悪くして告解せざるもの若くは之と反対の意思と希望と行爲よて塗抹せられたるものは皆悉く夫の審廷よ於て汝等を待つなり神は此等の爲よ汝を審廷よ曳出さん仁慈なる主よ爾の僕と認を爲す勿れ(聖詠百四十二の二)主よ汝若し不法を糾さば主よ誰か能く立たん(同百廿九の三)。

○巨大の太陽は此世の極めて微小なる物体とその測るべからざる多数に反映し人間の形は微小なる眼瞳中に寫る靈妙の大陽たるハリストスも亦猶此の如く微小の物体たる人間とその測るべからざる多数并よ己の体血の極めて微々たる部分に反映す何となれば本原の永遠なる生命は單純惟一なればなり太陽は大小無數の物体に反映しつゝ

全世界を照して悉く之を包括す主も亦然り。

○風は一のみ然れども測るべからざる無數の場所よ於て其勢力を逞うす之と同じく神の神も亦一のみ然れども天使の無數の會合に諸聖人の中に勢力と権能を顯はす彼れ己が任よ吹き汝其聲を聞く(約翰三の八)。

○主は管に悉くの骨を護る(聖詠三十三の廿二)のみならず聖人の像をも守り之を朽壞蔑如放棄に委して亡ぼさしめず乃ち吾人が奇蹟を施す聖像就中吾人の女宰神の至淨なる母の聖像出現の記事よ由りて知る如く奇妙よ之を見出すなり此の如く主は人間の像就中恩寵の器たる聖人の像を貴ぶなり彼は像よ由りて奇蹟を行ひ或は醫治及び慰籍

の無形の能力を賜ふ。

○神は我儕の心よりも大にして凡ての事を知り給ふ(約翰一書三の廿)  
 吾人は己の心の目を以て心中の極微の動作己の悉くの意思希望及び  
 志と凡そ吾人の靈魂に在る所のものを見て之を知らざるなし然れど  
 も神は吾人の心よりも大なり彼は吾人の衷より吾人の周圍にあり  
 見ざる所なき惟一の靈目として——吾人の心の目は只其の小模型たる  
 一過きず——到る處に在るを以て吾人の心中は悉く之を洞知し更詳  
 言すれば吾人自身よりも數千倍明か各人各天使在天の諸能力有生  
 不生の諸造物の内情を同時し明知し吾人の心中と諸造物の内情を洞  
 見すること恰も之を掌に指す如く而して之と同時に造物主及び照管

者として彼等の悉くと共にし彼等の悉くを存在及び能力に保持す。

○イエススハリストスに神性の全体は形體を爲して住むが如く(哥羅  
 西二の九)彼の体血の施生の機密に於ても然りとす微々たる人間の身  
 体は無限にして包括すべからざる神性充溢し微少き羔なる麵包と其  
 各小部分は神性悉く充溢せざるなし主よ汝の全能と仁慈と光榮を歸  
 す。  
 ○太陽は常に自ら天に在るも恰も無數の手を以てする如く己の光線  
 を以て地と其全面に達し有らゆる有機体は傳はり之に入り(即ち太陽  
 は己の光線を以て其体に入るなり)己の温氣を以て之を煖め之は活氣  
 を與へ之を成長し己の全体を以て透明のものは之に透徹し或は之に

反映し不透明堅硬不有機物は之を暖むる如く靈妙の太陽たる神も自ら専ら天に在りと雖も己の施生の神を以てすること恰も己の光線を以てするが如く普く有智の造物たる天使及び人間に傳はり夫の有機体及び植物体を透徹して之に活氣を予へ之を成長せしむる太陽の光線の如く天使及び人間の靈性を透徹して之を聖し之に活氣を予へ鞏固し成長せしむ太陽は自ら天に在り乍ら全地を照らし有らゆる萬物最も微々たる造物よまで其光を及ぼす如く主も己の三位の光を以て萬民を照す何となれば彼は斯世に來る凡ての人を照す誠の光なればなり(約翰一の九)

○凡を祈禱に於て主事へんと欲する者は宜く彼に倣ふて溫柔謙遜

及び誠意誠心の人と爲り心は狡猾を挾まず二心を懐かず冷淡と爲らずして彼の神を體せんことを努むべし何となればハリストスの神なきものはハリストスに屬せざる者なればなり(羅馬八の九)而して主も吾人の衷に己に似たるもの己に類するものを求むるを以て彼の恩寵は之に附着するを得べし若し祈禱に於て中心より其言を發する時は一言たりとも無益に失するものなきを記應せよ主は其各言を聴き各言皆彼れの衝に懸るなり時として吾人の言は徒らに空氣を衝くのみよして恰も曠野に絶叫する者の聲の如く響くが如く思はるゝことありと雖も是れ全く然らず主は祈禱に於て吾人の意に若し言ひ得べくんば吾人の言を了解すること恰も完全の祈禱者の自ら了解する如く



なるを記臆すべし何となれば人は即ち神の像なればなり主は人の言  
は表顯せられ若くは表顯せられざる心の希望は應ふるなり。

○予は疑なきの信を以て施生の機密を領しつゝ現はハリストスの在  
らざる所なきと感ず其狀果して如何他なし体の各部分と血の各滴と  
於て我は全体のハリストスを受け斯くして心の目よて其部分と滴は  
如何と夥く數ふべからざるはどなるも凡ての部分と滴とハリスト  
スの同時と全体のまゝ臨在するを見る主が凡ての聖堂と全体を以て  
在ますことも亦猶是の如し而して正教會の聖堂は全地と在るが故と  
主は嘗に其神性を以てするのみならず己の靈魂と身体とを以て全地  
に臨在し到る處其全体を以て分離的と信者と交接し之に良好の結

果を生じ即ち罪の赦とハリストスティアニンの靈身の成聖公義と平和及び  
聖神と由るの樂を起し凡ての信者を己並に父及び己の聖神とと合せ  
しひるなり加之彼は又熱心の祈禱と由りても父及び己の聖神と共に  
信者の靈魂と宿るは吾人の知る所なり主は普く物質世界と臨在しそ  
の總体と各部分と一齊に活氣を予へつゝ無論人間就中ハリストスティア  
ニンは臨在して之に住む爾曹若し棄てらるゝ者ならずばハリストスハ  
リストス爾曹の中と在り爾豈自ら之を知らずや哥林多後十三の五爾  
豈爾曹の身は爾曹の衷と居る神の殿なるを知らざる乎哥林多前六の  
十九

○人類は是れ全地と生ひ茂り己の肢を以て全地を蔽ふ神の唯一の大

木なり前の朽ちたる根——罪に陥りたるアダムに接く神の睿智と仁慈に由り新なる生きたる根——主イエスハリストスを以てせられハリストティアニンは一大木の分支として之より其原を發するなり木は土の生命有機体の生命ありハリストティアニンは社會はハリストスの生命天の生命属神的の生命あり故に眞誠のハリストティアニンの靈性的才能及び勢力を以て恰もハリストスイイスス其者の能力の如く見做さざるべからず使徒は眞誠の「ハリストティアニンを指して我儕ハリストスの心を有す」(哥林多前二の十六)と云へりされば徳行の如きも亦之を以てハリストスの恩寵の結果と見做さるべからずハリストス教的な生活せざるハリストティアニンは根なるハリストスより出づる分支の枯

枝として凡て實を結ばざる枝は在天の父之を剪除て火に投入る(約翰十五の二六)異教人は朽ちたる根——アダムより出づるの更生せられざる生命なき枝なり彼等も信仰に由りて生きたる健全の枝なる教會の體此のハリストスの體に接合せらる(哥羅西一の十八)

○樹の葉は是れ誰のものぞ神のものなり汝の有する善良の意思は是れ誰のものぞ神のものなり樹をして木目を織出し葉を生じ實を結ばしむる能は是れ誰のものぞ神のものなり即ち神より授かりたるものなり汝の有する思想と言語の能は果して誰のものぞ樹木はその神より授かりたる能力を悪用するか悪用することあり即ち神と神の眞理を識るが爲に神より

授かりたるの智を悪用し神と人とを愛するが爲め神と体合したるの幸福を感じるが爲め造られたるの心と限りなく徳と進歩するが爲め授かりたる自由の意旨とを悪用す。

○吾人の身体もその自然の運行も神は作用して之を維持養育成長しつゝあり草や木や動物も神は作用しつゝありて草は之を装ひ(路加十二の廿八)木は成長せし葉と果實を以て之を修飾し動物は其体を養育成長せしむ吾人は己の身体も何事をも造る能はず言ふ所の如く一すぢの髪だに白くし或は黒くすること能はざるなり(馬太五の卅六)主は何物も制限せられず普く萬物もあり相分たれず萬物の上も超然として極めて至大なるものも又極めて微々たるものにも等しく存

在するなり。

○木の葉は能く木なくして存するを得木は又能く土なく空氣なく水なく暖氣なくして存するを得るか此の如く一の靈魂たりとも神なく其子なく其聖神なくして存在する能はず神は我の存在我が呼吸我が光我が力我が水我が養育なり母が手も其子を抱くが如く彼れ我を抱き且つ管も抱くのみならず彼は我が靈身を抱きつゝ我も在りて我と混和す。

○神も祈禱するに方りては神の三位たることを記憶せよ而して彼は個位且三位なるが故も吾人が神の恩寵も由りて完全と爲りたる人例へば至聖童女マリヤ奇蹟者ニコライ金口イオアン神の神も滿被した

る使徒預言者等も就て想像するを得べきほどの諸徳を限りなく有するなり人は神の像神も肖たる者なり完全の像に依りて幾分か其原像の如何なるやを判するを得べし凡そ吾人の心の目吾人の心情を惹くも足るべき善美のものは神より出て其子と其聖神より出てたるものなり例へば聖ニコライは神の恩寵も由りて慈憐矜恤の人なりき彼は常も其の會て在世の時も有して今又神の恩寵も由りて有する慈愛心に依り誠心彼を顧ぶ者も聴く然らば主豈も自ら無慈憐無矜恤なりとするか如何も慈憐矜恤に富むと思惟するか彼れ自ら聖ニコライも比すべからざるほど大なるが如く其慈憐矜恤も亦限りなし或は使徒パウエルを擧げて例とせんか使徒の慈愛心も富む果して如何計りぞ彼は

僕フリモンの事も就其主人も請ふて彼を納れよ彼は我心なりと(腓利門一の十二)云へり此語も愛情を含むこと果して如何計りぞ彼の書愛の氣焰を吐くこと何ぞ夫れ熾なるや彼れコリンフ人も謂て曰く我儕の心廣くなれり爾曹我儕も狭めらるゝも非ずと(哥林多後六の十一)十二)彼は又或書も於て神の愛の如何なるやを説けり汝此書を讀まば使徒が其愛に就て言ふ所のこと彼れ悉く之を實行したる感を生せん夫れ然り然れども會て人の家も闖入し男女を曳捕へて無慈悲も之を獄も投じたるハリストスの窘逐歴虐者たりし使徒も此愛何處より生じたるか他なし愛の泉なる主より賜はりたるなり彼は獨り諸造物を包括する永遠無限の愛なり。

○吾人の神なる聖三者が三位なるも惟一の者たるが如く吾人も亦一  
 ならざるべからず吾人の神の單純なるが如く吾人も亦宜く單純と爲  
 り吾人皆恰も一人の如く一の智一の意旨一の心些少の惡をも混せざ  
 る惟一の善美の如く一言以て之を約すれば神は即ち愛なるが故惟一  
 の純乎たる愛の如くならざるべからず。我儕の一なるが如く彼等も  
 互一と爲らん(約翰十七の廿二)

○人間并々天使は皆是れ神の呼吸なり是を以て天使は靈(氣)即ち神の  
 呼吸と稱せられ而して人の靈は魂と稱せらる這は人の靈たる神の呼  
 吸より出て、神よて呼吸すればなり言ふあり曰く凡ての靈魂は聖神  
 よて生活し清潔よて高めらると(第一アンティフロン)然れども他の造物

も亦皆呼吸と稱せらる曰く凡そ呼吸ある者は主を讃揚げよと(聖詠百  
 五十の六)何となれば彼の造物は智識と自由をこそ賦與せられされ亦  
 皆神の神より出てたればなり故に造物は宜く之を保護し打擲疲困せ  
 しむべからず家畜を愛惜する者は福なり(哥林多前九の九)

○神は神なり單純の者なり神は何を以て己を表彰するか意思と言と  
 行とを以てす故に神は單純の者として意思の連續若くは多數又は言  
 若くは造物の多數より成立たず乃ち惟一の單純なる意思に於ての神  
 聖三者若くは一に合せられたる三位に於て其全体を存するものたり  
 然れども彼は萬物に其全体を存し萬物を貫き萬物を盈たす例へば汝  
 祈禱を誦せんか彼は其全体を以て言毎に臨在し聖なる火として各言

を眞く若し誠實熱心よ信と愛とを以て祈禱したらんよは各自ら之を  
 驗するを得ん然れ共彼は就中彼に屬するの名に臨在するなり即ち父  
 と云ひ子と云ひ聖神と云ひ或は聖三者と云ひ或は主と云ひ主神と云  
 ひ主サワオンと云ひ主イエススハリストスと云ひ神の子と云ひ聖な  
 る神と云ひ在天の王と云ひ慰藉者と云ひ眞實の神と云ひ其他の名よ  
 於て臨在するなり天使及び諸聖人も亦其名よ於て吾人よ親近なるこ  
 と恰も彼等の名と吾人の彼等よ對する信仰の吾人の心よ親近なるが  
 如し何となれば彼は神の呼吸よ外ならずして主と一靈なればなり哥  
 林多前六の十七

○吾人が願ふ所の聖人は果して吾人の爲に祈るか然り祈るなり若し

我罪人たる者冷淡の者時として邪惡偏私の者よして猶且我に祈禱す  
 ることを遺言し若くば遺言せざる他人の爲に祈り疑はずして假令時  
 として熱切ならずとも其名を祈禱し數へ上ることよ倦怠せずとせん  
 よは神よ於て及び神の前よ燃ゆるの燈よして己の此世の兄弟よ熱愛  
 を注ぐ神の聖人は吾人が有らん限りの信と望と愛を以て彼等よ願ふ  
 時豈よ我の爲め吾人の爲に祈らざるの理あらんや吾人の靈魂の補助  
 者及び祈禱者たる彼等も亦我が神よ啓迪せられたる母なる聖教會の  
 説く所の如く祈るなりされば汝は疑ふことなく神の聖人よ祈りて己  
 の爲め神の前よ彼等の轉達代求せんことを求むべし彼等は聖神よ於  
 て汝の言ふ所を聽く只汝は心中より聖神よ祈るべし何となれば汝等

誠心祈る時は聖神汝に於て息吹けばなり彼は真理及誠實の神にして  
吾人の真理及誠實なればなり吾人及び聖人は在るの聖神は同一なり  
聖人の聖なる所以は彼等を聖にし永久彼等も宿るの聖神も由りて聖  
なるのみ。

○主よ爾の我等に對する愛は凡ての父凡ての母凡ての情交濃かなる  
妻の愛も優ること限りなし請ふ我を憐めよ。

○女宰生神女よ爾の「ハリスティアニン」に對する愛は此世の凡ての母凡  
ての妻の愛も優る請ふ吾人の祈禱も於て我等も聽き納れ我等を救へ  
我等恒も爾のことを記憶せん我等常も熱心に爾も祈らん我等怠らず  
疑はず常も爾の聖なる庇蔭の下も走り付かん。

○吾人は至仁至淨なる神の母に祈らん然らば彼亦吾人の爲も祈らん  
吾人は彼れ凡ての榮も優る者を讃揚せん然らば彼は吾人も永遠の光  
榮を備へん吾人は彼も屢々「慶べよ」と曰はん然らば彼は其子なる神に  
請ふて我が愛子も彼等歡呼我を祝するも依り彼等も永遠の喜悅を予  
へよと云はん。

○汝は神の汝を見るを確信すること恰も面のあたり汝の前も立つ所  
の父又は其他の人の汝を見るを信するが如くせよ只其差は在天の父  
が悉く汝の心中も藏する所のものと汝の人と爲りと悉くの造物天使  
聖人我等罪人動物も至るまで一度も洞見すること恰も太陽が一度も  
萬民萬物を照すが如くなりと知るべし但し主の目は幾万倍も太陽も

り昭々乎たるなり(シラフ廿三の廿七)己の前は活潑々地は主を想見す  
ることは是れ靈魂の爲め平和と歡樂の源なり神の存在は疑を拂ひど  
きは心は不安と憂愁と懊惱を生ず誠心の祈禱は是れ心中安慰の源  
よして不誠實輕躁不注意の祈禱は心の害と爲るのみ。

○イエスハリストスは父及び聖神と共に慈憐の測るべからざる深  
淵なり此慈憐の深淵は萬民に垂るゝの矜恤餘りあり汝唯信を以て望  
を以て己の不正不義と吾人が主宰及び恩人たる主に加へたる侮辱を  
誠心痛悔するの念を以て主に向へば可なり。

○神は凡ての時於て何人よりも吾人を選し即ち我が衣服よりも近  
く空氣よりも光よりも近く我が妻や父や母や娘や子や友よりも近し

我は靈魂身体ともに彼によりて生活し彼によりて呼吸し彼によりて  
思想し感覺し判断し希望し發言し企畫し實行するなり我儕は彼に頼  
りて生き且つ動き且つ存す(行實十七の廿八)神はその善旨を行はんと  
て我儕の衷はたらし我儕をして志を立て事を行はしむ(腓立比二の  
十三)是を以て常に己の前に主を見て徒らに動かさず罪を犯さず何物たり  
とも彼を吾人の意思及び心中より逐斥せしめず何物たりとも彼の途  
を壅塞せしめざるが如く己を處し飲食金銀衣服家屋及び其構造并に  
諸種の人を對する如何なる私情たりとも將又如何なる斯世の娛樂及  
び遊戯たりとも之をして吾人より吾人を取りて最も快く吾人の最も  
深く愛する主を取去らしめず即ち吾人は時々刻々彼に屬し彼と相離



れざることを猶彼が吾人と相離れず常に吾人の爲に慮り吾人を守るが如くすべし。吾人罪を犯し又は何ものゝ對してか慾情起ることあらば彼は吾人より遠ざかるなり但しその遠ざかるは場所よりて然るゝ非ず—何となれば彼は凡ての時凡ての物を充たせばなり—乃ち我が心の彼より遠ざかると我が心の彼より心を傾けざるゝ由り彼が實際其恩寵を我より絶ち我が心より去るゝ依るなり何となれば此場合は彼れの敵なる魔鬼我より居ればなり。

○海湖若くは川に於て水の各分子が他の分子と相合し之より包圍せらるゝ如く若くは空氣に於て空氣の各分子が他の分子より包圍せられて之と相合する如く吾人此世より生れたる者も亦皆四方より神に包圍せ

られ而して吾人の中潔白なる者若くは清まりつゝある者は神と合して到る處彼れの裡に在るなり吾人此世より生れたる者は恰も水の如く空氣の如く枝葉の繁茂せる木の如く縦令敵の嫉妬より自愛心にて忿怒より離念より争論にて傲慢より異端又は岐教より嫉妬より吝嗇より交際嫌ひより憎惡より尊大及び其他の情慾にて屢々分裂せらるることありと雖も素と是れ一團のみ又一方よりは魔鬼及び其使も暗黒惡質有害の水若くは火氣を含める窒息殺人的の空氣として互より一團を組織す彼等は吾人を圍繞し吾人の靈魂の放心と種々の慾より乘じて之より闖入し以て吾人を暗まし吾人の心を擾亂壓迫焚燒し百方吾人を窘めんと努む例へば汝偶々香氣馥郁たる清淨の空氣より逍遙せんゝ俄

汚水溜若くは嘔吐物より臭氣發して汝の嗅官を衝くことあらば不快言ふべからずして速に其場所を過ぎ以て再び清爽の空氣を呼吸せんとすべし惡魔の臭氣亦猶是の如し主自ら左の言を以て魔鬼の暗黒なる群を空氣及び水に譬へたり曰く雨降り水溢れ風吹きて其家を撞けども家は即ち人を指すものにして人の靈魂を襲ふとの意なり倒れず基礎磐の上は在るが故なり(馬太七の廿五)

○人動もすれば輒ち曰ふ若し見ざりせば誘はれざりしならん若し聞かざりせば心をも傷めざりしならん若し食はざりせば復欲せざりしならん……視よ吾人の目や耳や味官より誘惑の來る幾何ぞ其心未だ善良の意嚮は固定せざるに漫然不淨の目よて看善惡を識別するは慣

れざる耳にて聞き貪食の味官よて食するよりして災を蒙りたる者及び蒙る者何ぞ其れ多き罪を嗜み墜くことを知らざる肉体の五官は知識及び神の誠にて箱束せられざるより彼等を浮世の種々の慾は誘致し其智と心を味まし心中の安慰を失はしめて意旨の自由を奪ひ以て之を己の奴隸としたり罪をして恰も窓より浸入する如く肉体の五官を経て心に入らしめ罪の首魁なる魔鬼其者をして天の鳥なる吾人の靈魂を味まし其の有毒致死の箭を以て之を傷つけざらしめんとせば見ることも聞くことも味ふことも嗅ぐことも觸るゝこと即ち己の心を守ることを慎重とするを要すること果して如何ぞや。

○靈魂は施生の機密は於て機密の中は主自ら實に存在すとの信の思

想と確認とを以て己れは主を領け而して吾人の肉体は口と腹と主を領く。靈魂確信を以て主を領くときは主はその瞬間は單純のものたる靈魂と全身とを貫徹す是れ靈魂が全身は充滿すると神性の充たざる所なき故に依るなり。

○「ハリステイア」の生活上は誘惑と吾人の靈魂の情態の試験必要なり而して吾人の生命は室内に在る物品に似て一種の汚物にて蔽はるゝが故に之を掃除すること必要なり。何等かの物品例へば銀の如きものを験せんが爲めには器械の必要なる如く靈魂を験するが爲め人間を以てし同種のものを経験するも同種のものを経験すること必要にして之をして知りつゝ若くは識らずして故意に若くは全く無意にして

て其の吾人は對する舉動を以て吾人は果して福音は明示されたる神命に服従するや否吾人は果して肉體的の行爲を殺し靈に從て生活するや否を吾人の爲め并に他人の爲め明ならしめ而して吾人若し神の旨を體せず吾人の最愛の救主の誠は從て生活せず己の有罪無智なる意旨は從て生活すること明かなるに於ては速に之を矯正して熱心に神の福音の誠は從ふに至るべし。

○吾人の肉体は其の組織されたる元素にて生活し常に空氣水及び有機体を吸収し吾人の靈魂はその因て出でたる神の神にて生活し己の生命を維持する爲め常に智と善意と心及び意旨の希望の光りと善を固守する由りて三位なる神の生命を吸収す身体が己と同種類の元

素よて養はれざれば生活する能はずして死する如く吾人の靈魂も祈禱若くは善良の意思感情行爲を以て生活せざれば即ち死す吾人の身体は或時まで營養適宜に行はれて身体成長するも偶々飲食よ由り若くは呼吸よ由りて毒物若くは傳染病毒の之に觸るゝことあれば之に醫治を施さるに於ては身体忽ち傷を覺え其の甚しきに至りては死することあるが如く吾人の靈の本性よも或時までは萬事適宜に行はるゝも魔鬼の之に感觸することあれば重傷を蒙りて恰も痲痺したるものゝ如く速に在天の良醫たる諸靈の神の佑助を仰ぐこと必要なり而して此佑助は信仰の祈禱に依るゝ非ざれば受くる能はず(人間の靈魂に對する魔鬼の感觸は夫の肉体に於ける毒に比すべし只物質的

の毒は吾人の身体を侵すこと稀なりと雖も此の魔鬼の毒氣は常に吾人と偕にし吾人の周圍にあり吾人の身体の生命を養育維持せんが爲めよは常にその生活する仲間即ち光空氣水食物等の皆備へられ其生活の爲め最も必要なる空氣は常に其身邊を圍繞し水は到る處に在り植物動物に至りても亦然り之と同じく吾人の靈魂の爲めよも其生命を保持するの能力たる靈の飲食衣服は三位の神に常に豊かあり主は空氣の如く若くは無形の光の如く常に到る處にありて吾人の生命の瞬間毎に吾人の信仰よ由り常に祈禱する如き心地よ由りて己の全能的恩寵を以て吾人の靈魂の勢力を保持せんとするの意あり吾人の爲め常に智と心の光と爲り我が靈魂の呼吸する空氣と爲り我が靈魂

の營養及び固めと爲るの食物と爲り我が靈魂を暖むる施生的温氣と爲り雷と我が靈魂の醜態を掩ふのみならず衰龍の衣の如く靈魂を修飾する衣服と爲る是れ實にハリストスに義とせられたるの衣なり人は己の存在の各瞬間物質界と神靈界の兩界に跨りて之より悉くのもを受け一は其の身体を維持し一は其靈性を保持す一は有形の体にして一は無限の個位の神の神なり此神は到る處萬物に充盈しつゝ萬物に卓越し萬物を維持して自ら何物にも制限せられず夫れ人間の微々薄弱なること此の如くにして己の存在を維持するが爲め受くるものは一も己れより出るも非ずして悉く外部より之を受け人自らは虚なり無なり其身体が空氣及び飲食にて維持せらるゝ如く靈魂も祈禱

と神の言の誦讀と聖機密にて維持せらる。又一方より見れば至仁全能なる神の國は罪に陥りたる惡鬼も居りて空氣と地とを以て其居所と爲し而して人は最初より彼等より由りて惡に誘はれ彼等は過去も現在も未來も世の終に至るまで常に人類と共に存在するを以て吾人の仲間と云ふべきものにして吾人は之に圍繞せられ吾人は其間を生活するなり人間は自由を有するの造物として一旦罪に陥り神の子として回復せられたるも其意のままに信仰と神に向ふの意嚮と善行にて此の回復の恩寵に立つ者なるを以て常に神に對するの祈禱を以て夫の吾人の靈魂を襲ひ吾人を虜にして精神に依り己と等しからしめんと欲する反抗の勢力を防衛せざるべからず吾人の精神行爲をして天の下

の悪鬼も等しからしめず彼等をして神の代り吾人の靈魂の呼吸と爲り彼等の天性たる悪をして吾人の悪とならざらしめんが爲め充分慎戒せざるべからず然れども吾人は常一之に就て我儕の衷に居る者は世の衷に居る者よりも大にして(約翰一書四の四)主は彼等をも全く己の權下よ保ち其公義仁慈睿智を鑑み人をして悔悟矯正せしめんが爲め此世よ其作用を逞ふせしむるを可とする時のみ之を容すことを記臆せざるべからず但し世よは魔鬼を以て己の衣とし己の飲食とすること恰も眞誠の「ハリステイアニン」がハリストスを衣其体血よて養はるるが如くする者あり此世よは到る處互に相反する二元あり靈と体善と惡是なり撒但は己の權威を人間の裡に張らんが爲め己の同謀者及び補助者を有し神は各「ハリステイアニン」を守護し之をハリストスの幸福なる國に導かんが爲め天使を有す。

○神の無所不在を信せざる輩は其意思と其心よて神の權能を誣ひ之は空氣の有する性質をも歸せざるなり何となれば空氣は到る處として在らざる所なきは空氣の造者豈に到る處に在らざるか神の在らざる所なき最も有力の證は無所不在に對する不信其者若くは何等かの罪なり不信起るときは我が心壓迫し焦がるゝ如き思を爲し智は味みて我は全く不快の情態に在り然れども神は到る處にあり在らざる所なく隨て我と偕に在り我が衷に在りと確信するときは我が心豁然として自由爽快を覺え活潑と爲り智は煌々として我は快然たる境遇に

あり此の如く我を殺すものは我が存在を疑ふ所の者の存在する争ふべからざる證たる也疑の我を苦むる所以は疑なる者は我が心若くは悪鬼の我が生命たる神に對する譏誣たるが故なり我が自由の靈魂よて生命其者(神)を思想上排斥するは靈魂の爲よ死たること固より當然なり更よ語を換へて云はんか神は思想的のものなり我が靈魂も亦同く本元の思想的のものより出てたる思想的のものなり故に我が神との交親は思想に由り心の信仰よ由りて起るものよして此信仰は神が到る處に在りとする活潑明白なる思想よ外ならず我よ斯かる思想なき時は是れ則ち反對否定的思想あるものなり我が靈魂と神とを連結する本原切斷するときには我が爲よ真誠の生命なく只有形詐偽動物的

生命の幻象あるのみ。  
 ○來世よ於ける幸福と苦痛の程度は一樣ならざるべし各人の現今の靈魂の情態若くは同一の人よして種々の時節よ種々の位置に際する時の靈魂の情態を以ても之を證するよ足るべし人は質撲善良よして慈愛心深ければ深きは内幸福を感じること深く狡猾奸惡にして自愛心深ければ深きは不幸を感じること亦深く信と愛強ければ強きは幸福多く弱ければ弱きは不幸なり薄信の人不信の輩嫉惡の徒は最も不幸なる人々なり來世の苦痛も亦之よ照して悟了すべし。  
 ○人は縦令罪よ陷るとも之を愛せよ罪は罪たるも人間よ在る本元は一のみ神の像即ち是なり他人は目よ觸るゝ弱點に由りて奸惡驕傲嫉

妬吝貪婪なる如しと雖も汝も亦惡なきも非す否恐くは汝の惡は他人よりも多からん。人間は罪に關しては少くとも同等なり曰く人皆罪を犯して神の榮を欲けりと(羅馬三の廿三)即ち人皆神の前罪ありて皆等しく神の吾人よ垂るゝ慈憐を要するなり故に互に相愛し互に相忍び他人の我等に對して犯せる罪を赦し在天の父をして亦我儕の罪を赦さしめんこと(馬太六の十四)を致すべし。されば汝須く全心を以て各人よある神の像を尊び且つ愛せよ神聖無罪なるは獨り神のみなれば彼の罪は目を注がず乃ち神は嘗て何物を創造し今又何物を造り寛大に罰し豊に恤みて如何に吾人を愛するかを見よ加之人は縱令罪を犯すとも常に翻然其非を改むることを得るものなれば宜く之を尊

敬すべし。

○開進したる人よして教會を以て己の敵と見做す者あり然れども何人よせよ愛情深く人の幸福を望むの念厚く人々に對する(神よ次ぎ)愛よして其當を得たらんよは是れ則ち教會なり凡そ吾人の天性に適する所のもの吾人の天性よ需要欠くべからざるものは之が倉庫たる教會よ包含すること恰も生命の言の福音よ含有する如し教會は正しくハリストスを信ずる全人類の眞誠の母ハリステアニンの最も信義厚き友なり彼れ教會は凡そ息ある者をして生活せしむる主イエススハリステアニンの身靈の欠くべからざる需要よ同情を表し且つ其需要



よ應ずるなり。

○頌讚よ就て『星宿燦爛たる天を仰ぎ視る時は覺えず頌讚の言口を衝て出つべしされど神の創造したる天や星を見て神が限なく人を愛し吾人をして救を得て天國よ安息せしめんが爲め己の獨生子をすら惜まずして人間の永遠の幸福を慮る等神の人間よ對する焦慮如何を想像するときは頌讚の情更に奮起すべし汝試よ汝が無より造られ汝が世の肇より功よ依らず全く徒然よして永遠の幸福よ預定せられ救贖の爲め生涯汝よ神の恩寵賜はり如何よ無數の罪汝に赦され且つ其の赦さるゝ一再よわらず測り知るべからざるはと夥しく身体の健康より空氣の流通水の滴に至るまで如何よ多くの天然の賜汝よ予へらる

るかを思はば神を頌讚せざるを得ざるべし苟も地中よ動物界よ植物界鐵物界よ造られたる物の種類の無限なるを見て驚嘆したらんよは覺えず頌讚の聲を發するよ至るべし大なるものたると小なるものたるを問はず萬物よ於て其構造何ぞ夫れ智巧なるや汝は覺えず頌讚して曰はん主よ爾の工業は何ぞ奇なるや皆智慧を以て造れり(聖詠百三の廿五)主よ爾萬物を造りし者よ光榮を歸とす。

○若し教會は三位一體の神に對する祈禱及び讚歌を作り之を傳へて一般の用よ供したりとせんよは是れ即ち神が吾人の祈禱を聽き常に祈禱する者の側よ在るを示すものなり然れども人の祈禱するや恰も神が己と共よ在らざるが如くし若くは神が其祈禱よ耳を傾けざる者

の如くする者多き居れり。セメテは夫の善良なる父母が子の願ひ對して表す所の注意と善良なる兩親が其子に對して懷抱する所の注意深き愛情なりとも主之れあるものとすべし。主自ら此の如く教へたり。曰く爾曹惡しと雖も尙善賜を以て己の子に予ふるを知る況て爾曹の天の父は己に求むる者に善物を賜はさらんやと馬太七の十一故に吾人の祈禱も若し心を籠めて祈らば必ず應驗あらん。是れ確かなり日々の實驗なり。

○汝の心は他人に對して憎惡の念起ることあらば汝は全心にて其事たる心中に作用する魔鬼の業なりと確信し魔鬼と其同類を惡めよ。然らば彼汝を棄て去らん。決して之を自己より出てたるものと認め之

に同情を表す毋れ。是れ予の實驗せし所なり。魔鬼吾人を以て己を掩ひ己の頭と己の尾を隠し以て巧く隠匿し而して吾人が蒙昧として其事皆吾人の自ら爲す所なりと思惟し魔鬼の爲す所の事を辯護すること恰も自己の爲す辯護するが如くし己の愆を正理なりとするの思想が全然詐僞として神意に背き有害なるに拘らず其事を以て正理なりとするは乃ち禍なり。他人に就ても亦之を標準とすべし。人若し汝を憎むことあらば彼れの憎惡を以て彼れが直接の所爲と爲す勿れ否。彼は只憎惡深き敵の被動的機具たるのみとして未だ全く其敵の諂媚を悟らず之に欺かるのみ。汝須く敵をして彼を去らしめ主は夫の惡靈の有毒腐敗の呼吸にて味まされたる彼れの心の目を明されんことを祈

るべし情慾は濁る、凡ての人の爲に熱心主と祈らざるべからず敵は彼等に作用しつゝあるなり。

○情慾は靈性的構造より傳染す例へば憎惡の如き未だ之を言語に發せず事實は顯さず心中に秘するのみにして微かき顔と目と反映するに止まるも既に我が憎惡する所の人の靈魂に傳はりて他人の鑑識する所と爲る、我が心慾にて悚動せんか我が悚動は他人の心も傳はりて一種の濁水の靈流が甲器より乙器に傳はるもの、如し汝兄弟に對する慾を絶てよ然らば彼も絶滅せん汝自ら心を安んせよ然らば彼も亦心を安せん靈魂の間の連結何ぞ夫れ密接なるや使徒が我儕互に肢たりと云ひ(以弗所四の廿五)或は我儕多きも一體なり(哥林多

前十の十七と云ふの言正確なり凡ての人は一の血脉より出てたり(行實十七の廿六)故に神の誠は汝の隣を愛する己の如くすべしと命す(馬太廿二の三十九)説教の効と無効とは吾人の靈魂の相互の感情若くは了解に基因するなり若し説教者の説く所赤心より出せず偽善なるときは聽衆は内心の覺官にて説教者の言の其心及び其行と相當せざるを悟り其説教は説教者の熱誠を以て演述し就中自ら其言を實行したる場合に於て有すべきが如き効力を有せざるなり人間の靈魂の間は甚だ密接なる内部の連結と交通ありて存す故に善良敬虔切實なる意向は他人の靈魂に通ずるものにして就中善行を然りとす。  
○人は靈魂と肉体より成るが故に其生命を維持する方法も之に應

じて二儀あり身体に關するもの及び靈魂に關するもの即ち是なり、身体の生命を維持するものは空氣、飲食、光、温氣として、靈魂の生命を保持するものは祈禱、猶空氣のごとし、神言の聽問、施生的の機密、敬虔の思慮なり。

○思想の飛行より取りて壁若くは現より汝の住する場所の障礙を爲さることは汝の實驗より知る所なり、思想は一瞬間より家よりして雲の上より或は世界五大州の此より彼に轉じ、甲國より乙國より飛び丙市よりして丁市より奔るを得、然れども思想及び智識の本原なる汝の靈魂は神の像、無限の神靈なる神の小肖像なり、若し夫れ四壁も汝の思想を拘束せず、空間と時間も之を壓迫せずとせん、は何物か能く萬物の創

造者たる主を拘束せんや、壁は豈に能く彼を拘束せんや、空間及び時間は吾人の見る所より如何に無限なりとするも、豈に能く彼を制限せんや、到る處として彼れの主權あらざる所なし、彼れの目は萬民萬物を看るなり、縦令山の奥若くは近づくべからざる城中の如き、隱密の場所より隠るゝものたりとも、彼れ之を視ること、恰も掌より指すが如し、主が時として汝の顔を隠し、恰も汝を慘憺たる靈界の暗黒より棄て、顧みざるが如くするは、是れ汝をして常より汝の靈魂が誰の光にて生活するか、即ち神の光にて生活するを記憶せしめ、神若し其顔を汝より遠ざけ、汝の心より己の聖神を取り去りたらん、は汝が實に地獄の闇、地獄の苦より陥るべきを悟らしめ、縦令聊かなりとも、實行を以て來世の苦の如何な

るかを知らしめんとす。

○汝は須く二様の人たるを信じて堅く之を記憶せよ一は肉体的にして情慾も惱まざる、古くして魔鬼に屬し肉体的のもの、みを尋ね生命の目的肉体のみありとするするなり、此者たる宜く撲滅して其意を満足せしめず其の有罪執拗悲哀的の號泣も耳を傾くべからず又一は心靈的にして新たよ健全よしてハリストスも屬し萬事は於てハリストスを尋ねハリストスよて(此世の情慾も代へ)生活しハリストスよ於て安慰及び生命ありと爲しハリストスの外此世よ於て何事をも有するを望まずハリストスを獲んが爲め此世の幸福を以て糞土と見做す者なり(腓立比三の八参照)前者の要求を遂行するは靈魂の害と爲る

を以て其要求は十分之を蔑視するの必要なる如く後者の要求は眞誠永遠の生命も導くものなるを以て其要求は百方力を竭して之を遂行せざるべからず凡そハリステアニンたる者須く此道理を辨へてその知りたる所のことを實地も履行するの勞を執れ。

○互に暗黒相譲らざる地獄の黒雲汝の靈魂を蔽ひ地獄の奸惡嫉妬猜疑抵抗等の念汝の靈魂も萌すとも汝決して憂悶する勿れ此等の黯淡たる黒雲が思想界の地平線上も現はるゝは避くべからざる事なりと知れされど彼の黒雲は恰も天然上黒雲の天も存する如く常も必ず存在するものも非ず又永續するものも非ず蔽ひかゝるかと思へば臆て過ぎ去りて再び靈魂の思想の空氣現はるゝなり自然界も於て天も黒

雲起り日光を闇ますこと免かるべからざるも此黒雲永續せず忽ち過ぎ去りて其後再び日光輝き且つ其輝くや更ニ皎々たり。

○人は奥妙の造物なる哉試に思へ土より造られたる者ニ神の箇体的獨立自由の呼吸——神其者の像は含められたり其像の肉身の殿の構造ニ睿智美妙の存すること幾何ぞ地の主宰たる人間——蓋し我儕の像ニ由りて人を造り全地を治めしめん(創世記一の廿六)と云へばなり——此の人間自らが生活上に於て現はす所の智と愛一言以て之を云へば尙神の点果して幾何ぞ然れども人よ汝をして傲慢せしめざらんが爲め神の像ニ由りて汝の衷ニ存する所のもの其殿より出るが如く汝の肉体より脱したるとき汝の如何なるやを思へ恰も汝は有らざるもの、

如く汝は此世の爲ニ消え失せ汝の靈の殿は悉くその善と美とを失ひ土と爲りてその取られたる所の土ニ復歸りその一部分として全く之と混和すべし——人間は神の奥妙の造物なる哉主は奥妙として塵ニ己の像なる不死の靈を宿したりされどハリストティアニシよ汝更ニ造物主の睿智全能仁慈ニ驚嘆すべきことあり彼は麵包と葡萄酒を化して己の至淨の体至潔の血と爲し之に己れ自ら即ち己の至潔施生の神を宿らせ斯くて彼の体血は併せて靈及び生命と爲るなり是れ果して何の爲ぞ他なし汝罪人を罪より清め且つ聖とし而して汝聖ニされたる者をして己と体合せしめ而してその体合したる者をして神恩ニ浴せしめ幸福の者と爲し不死の者と爲さんが爲めなり嗚呼奇なる哉救贖者

の仁慈と睿智と全能や(羅馬十一の三十三参照)。

○汝は諸般の族籍及び職分に於て下級下位の輩が恭敬翼々整々として其長官の四邊に事を執りその相互の執務にて其服従の義務を盡すを見たるか汝又曾て國王近侍の臣が如何に慎重の敬意と如何に嚴肅なる禮儀を以て事を行ふを見ざるか是れ皆造物が造物主の周圍に在りて其身を處するの模範にして此の造物主の周圍に在りて整々其分を竭し彼れの法に服従するは是れ其幸福及び生命の目的なり。

○時として人は熱心祈禱するが如くなるも其祈禱は之に安んずる聖神に由る喜悅の結果を呈せざるべし是れ何故ぞ他なし成文の祈禱に由りて祈りつゝ其日は犯してハリストスの殿たる己の心を汚し以

て主の怒を招きたる罪を誠心痛悔せざるに依るなりされど彼一たび之を悔い赤心無私に己を罪さば人の凡て思ふ所を過る平安腓立比四の七忽ち其心は起らん教會の祈禱文中には罪を枚擧しありと雖も悉く枚擧し盡したるに非ず且つ吾人が己を束縛したる罪のことは記載せられざることすら往々之れあり宜く祈禱に於て其罪の重大なる關係あるを確認し謙遜の情と誠心痛悔するの心を以て必ず自ら之を枚擧せざるべからず故に晩課の祈禱に於て罪を枚擧するときは或は何々したり或は是れ惡しき事を行へりなど云ふは即ち彼此の罪を認むることの吾人の意に一任せられたるを示すなり。

○吾人の教と教會は最と尊く聖にして賢く強壯饗樂として勇壯活潑

能く己の信實の子に生氣を賦するの精神を有する老人に似たり吾人の老人に對するやその多年の經驗の結果たる白髪と智能を尊敬して己を處するに常に慎重の態度を以てし深くその一言一句を重んじ之を實行に應用する如く殊に深く教會を尊敬しその神聖なること古きこと毅然として動かざることを其の靈智を備ふること心靈上の經驗に富むこと其の救贖的の誠命制規と其奉神禮機密及び儀式に對して敬意を表せざるべからず教會が己の懷よて勝て敷ふべからざるの人を救ひ之を永遠の安樂の所に遷し此世を逝りて後も猶之を忘れずして此世に於て今日に至るまで己の信實の子として永遠に其美德を頌讚稱揚して已まざるの一事を見ても争でか彼れ教會を尊敬せずして可

ならんや汝何處に於て彼れよりも深く恩義を重んずるの友彼れよりも愛情深厚なるの母を求むるを得んやされば凡そハリステイアニたる者は己の心よて全くハリストスの教會に附着し此世の生命の終焉まで毅然として教會に固定し熱心銳意其の悉くの誠命及び成規を遵奉せんことを努め彼に於て吾主ハリストスイイススに因る永遠の救贖を求むべし。

○神の睿智なる計圖は由り此世に於て甲は乙より先だち丙は丁と新陳代謝す即ち不名譽と名譽貧困と富裕壯健と疾病是なり主は富を賜ふに先だち往々窮乏を以て之を試み富者は之をして全く其財を失はしめ名譽を予ふるに先だち之を試むるに不名譽を以てし名譽赫灼たる



者は之を試むるに凌辱を以てし吾人をして神の賜を重んじ幸福裕かなる時と雖も其幸福は吾人の功より得たるものに非ず主宰(神)の賜なるを知りて傲慢すべからざるを諭さんとす。

○心をして祈禱するの念を起さしむること必要なり然らすんば心全く枯死す神は對するの愛誠實及び質撲は是れ祈禱の性質なり神は神(靈)なるを以て祈禱するは肉体を以てせず靈を以てせざるべからず又神は眞なるを以て之に祈禱するに諂媚を以てせず眞實を以てせざるべからず聖人より對するの祈禱も亦爾が云はざるべからず彼等を顧ぶる口のみを以てする勿れ—彼等は口を有せず聲を有せず毫も肉体的のものを有せざればなり—乃ち心を以てし若くは燃ゆる靈

を以てせよ蓋し類は類を尋ねればなり且夫れ神の國を嗣ぐ者は血肉も非ずして神に對するの愛よて燃ゆる清淨の靈魂なり。

○神の言は靈を熄す勿れ(帖撒前五の十九)と云ふ、「ハリステイアニン」就中司祭及び子女の教育者たる者之を服膺せよ就中吾人が神と人類に對する高尚の務めを行ふ時、當りて常に靈精神よて燃ゆること必要なり吾人若し信を以て愛を以て誠實を以て熱心銳意己の業に従事したらんよは神の爲め人々の爲め并己の爲め盡すこと多々ならんも緩慢懶惰冷淡よ切實銳意なくして事を行ひたらんには其の盡す所や微々無味無結果ならん吾人は己の爲め并吾人の慮よ委ねられたる者の爲め神の前より對する大答辯よ於て其責を負はん。

○救助を要するの貧者が汝に向て救助を請ふ時は須く自ら慎めよ此  
 時敵は冷淡を以て淡白を以て甚しきは貧者は對する輕蔑を以て汝の  
 心を縛らんとす汝宜く自ら此の非ハリストステイアニンの非人間的の意  
 を抑制し己の心中に萬事於て汝に等しき人間此のハリストスの肢  
 汝と同体の者——蓋し我儕互に肢たればなり——此の聖神の殿に對する  
 側愼の愛情を起し以て亦自らハリストス神の愛を蒙らんことを努む  
 べし貧者が汝等に請ふ所あらば力に應じて其の求めに應せよ汝に求  
 むる者に手へ汝に借らんと欲する所を卻くる勿れ馬太五の四十二  
 ○祈禱の言を發するに熱誠を以てすべし晚に祈禱するに當りて聖神  
 に對する祈禱に於て誠實と痛悔の心を以て汝が過ぎ去りし日は犯せ

し所の諸罪を告白するを忘るゝ勿れ熱誠痛悔すること數秒ならば汝  
 は聖神に由りて諸の汚穢より清められ雪よりも白くなりて心を清め  
 たる涙は汝の目より流れ出てハリストスの義の衣にて掩はれ彼が父  
 及び聖神と相合する如く汝も彼と体合せん。  
 ○心靈貧きとは己をば殆ど有る無き者の如く見做し獨り神のみ  
 を有る者とし神の言を以て此世に於て何者よりも高尚のものとし之  
 を遂行するが爲めは何物をも顧みず己の生命をだも惜まず神の旨  
 を以て己の爲め并に他人の爲に等しく貴きものと爲し己の旨をば全  
 く之を排するの謂なり心の貧き者は全心にて願くは爾の名聖とせら  
 れ爾の國來り爾の旨行はれんことを望み之を口にし彼は恰も自ら消

之失せたるが如く到る處何事よ於ても己の衷も他人も神を見んと欲するなり何事よまれ爾の旨成りて我が旨の如くならざらんと云ひ己及び萬物よ於て神の神聖を觀察せんと欲し彼れの國彼れの旨をも亦同く觀察せんと欲し獨り神を以て當然に人心を充たす者と爲さんと欲す何となれば神は獨り有る者至仁完全萬物の創造者よして其敵なる魔鬼と其黨與及び神よ逆ふ人々は是れ神の國よ於ける盜及び神の敵なればなり心の貧き者よ取りては全世界も殆ど有らざる者の如く到る處よ於て萬物よ生命を施し萬物を統治する神のみを見彼の爲よは所として神の有らざる處あるなく一瞬間たりとも神の有らざる時あるなく彼は到る處常よ神と偕よし恰も神と與よのみあるもの

の如し心の貧き者は端倪すべからざるものを端倪し神の秘密を發き玄妙の理を敢て臆測せんとせず又臆測せんとするの意なし彼は神の言は一言二句皆眞理たり神たり永遠の生命たるを知りて施生者たる主の言と常よ聖神よて諸の眞理を啓發せらるゝ彼れの教會の言を信じ其の之を信するの篤きこと恰も子が其父若くは其母の言を確信して證を求めず全く之よ信を措くものゝ如し心の貧き者は己を以て人より最後の者最も罪深き者と見做し自ら以て衆人よ蹂躪せらるべき者と見做す。

○聖神よ由りて己の祈禱を作り以て己の爲め并よ吾人の指導としたる神の聖人が如何に明々地よ神を想見し如何よ戰々兢々として而も

如何に深き愛と望とを以て神の前より立ちたるかは想像するに餘あり。彼等の祈禱言ふ所は皆神我等と偕すといふ神は我衷ありて我等の言を聴くと云ひ我等の思想我等の希望我等の涙涙の滴を一々見ると云ふ。

○吾人時として聖堂若くは家裡の祈禱に於て身靈共に衰ひ我が靈魂は無氣力冷淡無結果となり恰も夫の異教の無結果なる堂宇の如くにして立つことありされど一たび己の心を籠めて神に赤誠の祈禱を捧げ活信を以て神に己の思と心とを傾くことあらば我が靈魂に忽ちにして蘇生し暖まりて實を結ぶの力を得んその忽ちにして起る所の安心爽快感動内心の神聖なる火前非を悔るの熱涙その罪よて至仁の

主宰の震怒を招きたることを誠心痛悔するの情心と智とよ起る光舌より或は筆より滾々として流れ出る活水の注流の心よ流れ込むこと果して如何ぞ靈界の荒原は主の心よ臨みたるよ由りて榮ゆること恰も百合の花の如しア、曷ぞ吾人は己の心を屢々主に向けざるや吾人の爲め安慰の常よ彼れよ蓄へらるること夫れ果して幾何ぞ主よ大なる哉爾の恩爾を畏る者よ蓄へらるる所のもの(聖詠三十の廿)  
○夫の鳥や伶俐く注意周到にして神の世界の茫々たる蒼空に於て能く人をして己を捕はしめず人彼よ近づき之を捕へんとすれば忽ち高く飛び去りて獵者の手を脱るハリスティアニンも亦無形体の獵者をして其靈魂を捕はざらしめんが爲め是の如く伶俐く且つ注意周到な

らざるべからず吾人の靈魂は恰も天空の鳥の如く悪魔は人の靈魂を  
呑まんとして之を尋ねる残酷なる獵者の如し鳥の高く飛揚して獵者  
の手を脱るゝ如く吾人も此世の物を以て我が靈魂を捕へんとする悪  
魔なる敵を見る時は己の心よて直之を棄て去り瞬間も之よ心を傾  
けず己の思念よて高く吾人の救主たる主イエスは飛び付くべし斯  
くせば獵者の網聖詠九十の三を脱るゝこと易やたらん。

○善事よ奏功する方法』家よ在りて晩課若くは早課の祈禱を爲す時  
又は聖堂に於て奉神禮よ興り祈禱する時は其事の成らんことの慮と  
神の榮の爲め之を成就せんとするの熱切なる希望を心よ懐くべし主  
及び彼れの至淨なる母は必ず汝を啓發し如何にして之を成就すべし

かの歴たる思想を汝の心に入れん汝は講談若くは説教を書かんと  
欲してその書かんと欲する所のことを知らず汝の心よ活水なき時は  
祈禱よ於て誠心其事を慮るべし然らば主及び彼れの至淨なる母は必  
ず明よ汝に説教の主旨と其枝葉の点とを示し汝の智と心は啓發せら  
れて主旨の全体を明知するに至らん。

○神が其像と肖とよ由りて汝に理性を具有する自由不死の生命を賜  
へたるが爲め日々全心を以て彼よ感謝せよ就中彼が單よ全能の作用  
を以てせず——蓋し斯くしたらんよは彼の公義よ矛盾すべければなり  
—乃ち吾人の爲よ己の獨生子を予へて贖とし之をして吾人の爲よ苦  
を受け死よ至らしめ以て汝永遠の死よ陥りたる者を恢復して再び生

命は向はしめたるが爲め彼は感謝せよ、又汝は日々自ら知りつゝ勝て  
 數ふべからざるはと屢々罪よりて生より死に陥るも單に汝が天及  
 び爾の前は罪を犯せり(路加十五の十八)と云ふよりて再び汝は生命  
 を賜ふが爲め彼は感謝せよ、又汝は自ら無分別にして身体の死の前兆  
 たる疾病に罹ることあるも彼れ屢々其病より救ひ汝の罪を悔めしめ  
 汝の生命汝の爲に貴く汝が彼の永遠の生命に移るの準備の未だ足ら  
 ざるを知りて汝をして生命を失はしめざるが爲め彼は感謝せよ、生活  
 の諸般の方便度生上より於ける喜と哀の爲め彼は感謝せよ、蓋し總ての  
 こと皆彼れ至仁の父より出るものにして萬事皆夫の萬物に生命を分  
 賦し及び貸付けたる本元の生命より出づればなり。

○慈愛は富み廣く衆に施して之が報酬を意に介せず善を行ひ人を満  
 足せしむるの機會を得たりとて喜ぶ人こそ篤實高尚の氣象ある人と  
 云ふべけれ、屢々我が許し訪ひ來りて之は惠を施すも決して其人を識  
 るとせず如何なる事は關しても之を蔑視せず己の意中は聊かなりと  
 も之を卑下せず其人を見ること始めて面會したる時の如く若くは更  
 に高尚の人と見做す人こそ篤實高尚の氣象ある人と云ふべけれ、然る  
 に吾人は我が友と爲りたる者と親むことと對して自惚れ恰も我がも  
 のと爲りたるもの、如くし之は慣れて間もなく之は厭き之を何とも  
 思はず人を以て我が愛玩する所の物品若くは寵愛する所の動物より  
 も卑下すること往々之れあるを例とす。

○祈禱は於て時として主に對する熱信熱愛よて呼吸する自己の言を述ぶるは善し。然り吾人は神と語るよ悉く他人の言のみを以てせず始終信と望とよ幼稚ならず乃ち宜く己の智をも表示し己の善言をも心より吐き出すべし(聖詠四十四の二)且つ他人の言に對しては慣れて冷淡と爲るの僻あるなり主を信じ主を愛し深く其恩に感ずるの心より直接發生する吾人自己の嬌語の如何に主を喜ばるゝかは得て言ふべからず只靈魂が神に對して語る時歡び極まりて戰慄し滿腔熱して生氣満々幸福を感ずと云ふべきのみ汝言ふこと僅々數言なるもその幸福を感ずること赤心を以てせず習慣に依りて唱ふる他人の最も長く最も感動すべき祈禱よりして得る所のものよりも更なるべし。

○凡そ主に求むる所のものあらば直に汝に己の賜を予ふる彼れの至仁鴻慈なる右手——神の剩餘よりして萬民に有らゆるものを予へ今又予ふる所の右手——を想像し其の求むる所のものを得るや否を疑ふを以て恰も預言者の所謂己の心よて神なしと云ふ(聖詠十三の二)と等しき愚痴と見做すべし吾人苟も善良慈憐の人を救助を請ふ時は預め其の施す所の手を想像すべし何となれば此世の慈善の君子は其の至仁なる父(神)に似て善良慈憐にして吾人々に求むることあれば聖書に言ふ所の如く直に予ふればなり曰く爾曹の中孰か其子麵包を求めんよ之は石を予ふる者あらんや又魚を求めんよ蛇を予ふる者あらんや爾曹惡しと雖も尙善賜を以て己の子に予ふるを知る況て爾曹の天の父

は己<sup>おのれ</sup>よ求<sup>もと</sup>むる者<sup>もの</sup>よ善<sup>ぜん</sup>物<sup>ぶつ</sup>を賜<sup>たま</sup>はざらんや(馬太七の九至十一)

○信仰<sup>しんじゆ</sup>の箇<sup>か</sup>條<sup>じょう</sup>よ關<sup>かん</sup>して己<sup>おのれ</sup>の心<sup>こころ</sup>よ懊<sup>あう</sup>惱<sup>なう</sup>たる執<sup>しつ</sup>拗<sup>う</sup>若<sup>じやく</sup>くは不<sup>ふ</sup>信<sup>しん</sup>を感<sup>かん</sup>ずることあらば敵<sup>てき</sup>汝<sup>なんぢ</sup>の心<sup>こころ</sup>よ在<sup>あ</sup>りと知<sup>し</sup>れ彼<sup>かれ</sup>は實<sup>じつ</sup>よ汝<sup>なんぢ</sup>の無<sup>む</sup>智<sup>ち</sup>汝<sup>なんぢ</sup>の薄<sup>はく</sup>志<sup>し</sup>汝<sup>なんぢ</sup>の信<sup>しん</sup>仰<sup>じやう</sup>篤<sup>あつ</sup>からざるを嘲<sup>てう</sup>笑<sup>せう</sup>しつゝあるなり汝<sup>なんぢ</sup>速<sup>すみ</sup>よ誠<sup>せい</sup>心<sup>しん</sup>己<sup>おのれ</sup>の無<sup>む</sup>識<sup>し</sup>己<sup>おのれ</sup>の愚<sup>ぐ</sup>昧<sup>まい</sup>己<sup>おのれ</sup>の信<sup>しん</sup>仰<sup>じやう</sup>の篤<sup>あつ</sup>からざること以<sup>い</sup>前<sup>ぜん</sup>の心<sup>こころ</sup>の光<sup>ひかり</sup>と汝<sup>なんぢ</sup>が今<sup>いま</sup>汝<sup>なんぢ</sup>の心<sup>こころ</sup>の愚<sup>ぐ</sup>昧<sup>まい</sup>なる執<sup>しつ</sup>拗<sup>う</sup>よ由<sup>よ</sup>りて斥<sup>しり</sup>ぞけ若<sup>し</sup>くは曾<sup>かつ</sup>て信<sup>しん</sup>せし如<sup>ごと</sup>く信<sup>しん</sup>せざる所<sup>ところ</sup>の物<sup>もの</sup>(不<sup>ふ</sup>朽<sup>きう</sup>聖<sup>せい</sup>體<sup>たい</sup>)を信<sup>しん</sup>するよ由<sup>よ</sup>りて受<sup>う</sup>けたる所<sup>ところ</sup>の以<sup>い</sup>前<sup>ぜん</sup>の恩<sup>おん</sup>惠<sup>けい</sup>の爲<sup>ため</sup>め神<sup>かみ</sup>よ感<sup>かん</sup>謝<sup>しゃ</sup>せざりしことを自<sup>みづか</sup>ら罪<sup>つみ</sup>せよ然<sup>しか</sup>らば主<sup>しゆ</sup>宰<sup>さい</sup>は汝<sup>なんぢ</sup>を憐<sup>あは</sup>れ憐<sup>あは</sup>れ懊<sup>あう</sup>惱<sup>なう</sup>忽<sup>たち</sup>ち過<sup>す</sup>ぎ去<sup>ま</sup>りて心<sup>こころ</sup>俄<sup>に</sup>輕<sup>けい</sup>快<sup>くわい</sup>と爲<sup>な</sup>らんア、敵<sup>てき</sup>よ彼<sup>かれ</sup>は信<sup>しん</sup>仰<sup>じやう</sup>よ關<sup>かん</sup>してても萬<sup>ばん</sup>事<sup>じ</sup>己<sup>おのれ</sup>の偽<sup>いつはり</sup>よ應<sup>おう</sup>じて成<sup>な</sup>らしめんと欲<sup>ほつ</sup>するなり。

○新<sup>あらた</sup>なる(改<sup>か</sup>新<sup>しん</sup>せられたる)人<sup>ひと</sup>は聽<sup>ちやう</sup>從<sup>じゆ</sup>よ於<sup>お</sup>て樂<sup>たの</sup>みありとし舊<sup>ふる</sup>き人<sup>ひと</sup>は抵<sup>たい</sup>抗<sup>かう</sup>服<sup>ふく</sup>從<sup>じゆ</sup>せざらんと欲<sup>ほつ</sup>すされば主<sup>しゆ</sup>よ願<sup>ねが</sup>はくは爾<sup>なんぢ</sup>の旨<sup>めい</sup>成<sup>な</sup>らんことを凡<sup>おま</sup>を我<sup>われ</sup>が上<sup>うへ</sup>よ立<sup>た</sup>てられたる所<sup>ところ</sup>の有<sup>いう</sup>權<sup>けん</sup>者<sup>しゃ</sup>の我<sup>われ</sup>に命<sup>いのち</sup>する所<sup>ところ</sup>のこと凡<sup>おま</sup>を他<sup>た</sup>人<sup>にん</sup>が我<sup>われ</sup>と備<sup>そな</sup>へして行<sup>おこな</sup>ふ所<sup>ところ</sup>のこと(忍<sup>にん</sup>耐<sup>たい</sup>)凡<sup>おま</sup>を我<sup>われ</sup>身<sup>み</sup>よ遭<sup>あ</sup>遇<sup>う</sup>する所<sup>ところ</sup>のことは皆<sup>みな</sup>之<sup>を</sup>を以<sup>もつ</sup>て爾<sup>なんぢ</sup>の旨<sup>めい</sup>の表<sup>へう</sup>示<sup>し</sup>と見<sup>み</sup>做<sup>な</sup>す何<sup>なん</sup>となれば一<sup>いつ</sup>として爾<sup>なんぢ</sup>の旨<sup>めい</sup>に由<sup>よ</sup>らずして遭<sup>あ</sup>遇<sup>う</sup>するものなければなり爾<sup>なんぢ</sup>は萬<sup>ばん</sup>物<sup>ぶつ</sup>よ於<sup>お</sup>て萬<sup>ばん</sup>物<sup>ぶつ</sup>萬<sup>ばん</sup>事<sup>じ</sup>を貫<sup>つらぬ</sup>きて有<sup>あ</sup>る者<sup>もの</sup>なり。

○神<sup>かみ</sup>は靈<sup>れい</sup>妙<sup>めう</sup>よして萬<sup>ばん</sup>物<sup>ぶつ</sup>彼<sup>かれ</sup>れより出<sup>い</sup>て彼<sup>かれ</sup>れなくんば何<sup>なに</sup>物<sup>もの</sup>も有<sup>あ</sup>り得<sup>え</sup>べからず萬<sup>ばん</sup>物<sup>ぶつ</sup>の本<sup>ほん</sup>元<sup>げん</sup>繼<sup>けい</sup>續<sup>ぞく</sup>生<sup>せい</sup>命<sup>めい</sup>及<sup>およ</sup>び保<sup>ほ</sup>存<sup>ぞん</sup>なり彼<sup>かれ</sup>れよは決<sup>けつ</sup>して始<sup>はじめ</sup>有<sup>あ</sup>るなく又<sup>また</sup>決<sup>けつ</sup>して終<sup>しま</sup>りある時<sup>とき</sup>なし彼<sup>かれ</sup>れに對<sup>たい</sup>しては萬<sup>ばん</sup>物<sup>ぶつ</sup>恰<sup>ただ</sup>も無<sup>な</sup>きものゝ如<sup>ごと</sup>く彼<sup>かれ</sup>れは到<sup>いた</sup>



る處萬物に在り、一の極微分子たりとも山も天の物体も海も空氣も火も土も如何なる空間よりも彼を追出すこと能はず、彼は凡て物体の占有する場所を永遠より占有し自ら己の力を以て其物体を保持す、彼は凡ての場所空間の得て想像すべからざる線内、在り自ら無限、凡ての空間を維持す、一言以て之を云へば神は有る者即ち獨り有る者獨り存在するが如き者なり。

○若し汝の兄弟奉事に於て不正若くは杜撰、行ふことあるも汝之、對して内心よても表面よても怒る勿れ、乃ち自ら此世、於て多くの罪を犯し、汝自ら諸の弱点あるの人として、神が寛容鴻慈、汝及び我等衆人、吾人の不義非道を數限りなく赦免するを記憶して、其過失を寛恕せ

よ、宜く主禱の中、「我等、我等の負を赦すこと、我等も亦我等も負ある者を赦すが如くせよ」とあるの語を服膺すべし、此語は常、吾人をして吾人自ら神の前、對する大なる負債者大なる罪人たるを想起せしめ、之を想記して己の心の奥、よて謙遜り吾人と等しく、荏弱なる兄弟の過失を嚴責せず、吾人自ら己を嚴責せざる如く、他人をも嚴責せざらしめんとするものなり、蓋し兄弟は吾人の肢として、殆ど吾人自身の如きものなり、抑も激怒の發するは己を識らざると傲慢なると又一、は吾人が己の天性の甚しく傷害せられたること、思ひ到らず、溫柔謙遜なる、イエスを識るの淺き、よ因るのみ。

○主は吾人の心の種々なる罪の情念を驗する、諸種の方法を以てし

或者吝嗇の者を驗するに金錢若くは財産若くは其所有物の一部分の損失を以てし窃盜をして之を盗ましめ強盜をして掠奪せしめ又或者を驗するに失火を以てし或は洪水を以てし又或者を驗するに疾病と疾病と伴ふ藥劑診斷費等を以てし或は妻姉妹友人の死亡を以てし或は不名譽を以てし人を驗するに諸般の方法を以てし各人をして其心の弱點欠點を曝露せしめ各人をして自ら檢改せしめんとす劍多くの人の心を刺透し其心の念を露はさしめんとす路加二の卅五故に汝の財産如何なる損失を來すとも之に主の旨ありと信じ且つ曰へ主は與へ主は取りたまふ主の名は讀むべきかなと(約百記一の廿一)

○人が時として俄に狂暴と爲り忽ち佛然として急速斷續漫よ怒號し

手を掻き髪を抜き或は激怒の餘り他人を毆打し妄よその手よ觸るゝ所のものを破碎し其他狂人がまじき振舞を爲すことあるは何故ぞ他なし人を諸惡よ教唆煽動し万民万物に向て奸惡と殺害の氣を吐く天の下の惡靈其心よ在りて作用するが故なり諸種の自殺者并に兇殺者の世よ絶えざるは何故ぞ是れ自殺者及び兇殺者の心よ古來の自害者

— 魔鬼の及ばず作用よ依るなり故に救主ハリストス及びハリストス教は衆人及び各人を死よ致さんと欲する奸惡及び驕傲の靈をして人心よ其力を逞うせしめざる溫柔及び謙遜の徳を修むべきことを人々よ戒む主曰く我は溫柔謙遜なり爾曹我に學べと(馬太十一の廿九)抑も人間の怒なるものは恐るべき非天然的の現象なり其起るや吾人の心

中ニ潜伏する自惚と傲慢の故ニ由りて取るニ足らざる些事に因すること多し人の怒は神の義を行はず(雅各一の二十)とは宜く味ふべきの言なり。

○誠心神を信する者に取りては此世及び凡そ有形世界の諸物は皆恰も消え失せたるが如くにして神なくしては空間の—想像線も彼れの爲ニ無きなり彼は到る處ニ唯一無限の者—神を視るのみ彼は空気を呼吸する毎ニ神ニ由りて呼吸すと思意し彼れの爲ニ主は到る處に在り万物の中ニ在り造物は殆ど存在せざるもの、如く彼意中ニ好んで自ら消え失せ以て彼の衷ニ働く惟一の神をして己の裡にも其所を得せしめんとす。

○時として主と樂むこと須臾にして忽ち敵は或は自ら或は人々を経て汝ニ至大の憂悲を蒙らしむることあり是れ此世ニ於て主ニ事ふる者の免かるべからざる運命なり例へば汝主の爵ニ由りて心ニ安慰快樂を覺ゆることあるも奉事の後直に火の如き誘惑汝を襲ひ之と共に亦悲哀の來ることあり聖爵ニ於てすら敵は汝ニ奸計を施し種々の思想を以て汝の心を攪亂す汝は假令好まざるも之と闘へよ汝は悠々主と安息せんと欲するも敵は汝をして安息するを得せしめず吾人の裡ニ情欲の作用を逞ふし吾人の裡に舊き人猶生存して未だ死せざる間は吾人は生活上ニ於ける種々の誘惑舊き人と新なる人との闘争の爲め多く憂悲せざるを得ず。

○求めよさちば爾曹よ予へられん……又爾曹の中孰か其子麵麴を求めんに之に石を予ふる者あらんや——馬太七の七、九てふ此の主の確むる言は祈禱する者よ至大の奨勵慰藉と至大の希望を予ふるなり若し夫れ他人我よ向て求むることあらば我は天性の壞傷したる故に因りて惡なりと雖も他人の願に耳を傾け其人の言は我が心をして慈憐佑助に傾かしめ我が手をして施濟を行はしむとせんよは我が言我が至誠の願は安んぞ主の至仁なる腹をして假令罪人なりと雖も彼れの造物彼れの手の工なる我に對し慈憐佑助を傾かしめざらんや若し此世の父よして善なりとせんよは況んや在天の父をや若し我れ善なりとせんよは況んや仁慈の源なる神豈よ善ならざらんや爾曹惡しと雖も

尙善賜を以て己の子よ予ふるを知る況て爾曹の天の父は己よ求むる者よ善物を賜はざらんや馬太七の十二父の子よ對する此世の干繫を以て己の神よ對する信と望を堅うせよ吾人は是れ唯一の天父——諸造物の父の子なり。

○汝若し或る俗界の事物に戀々たるより汝の心よ安和を欠きその代りよ忿激憎惡の氣煽心よ發すと感する時は直よ心を警戒し惡魔の火をして心よ満さしむる母れ汝須く誠心祈禱し神の力を以て汝の情欲よ溺るゝ不堅忍の心を堅うせよ心の臭氣紛々たる炎熱は敵の所業なり敵は滿腹よ乘じて心を襲ふこと最も強し是れ實驗なり。

○親戚若くば知己の者よ招かれ客として之に臨む時は善く飲食せん

が爲に赴かず彼等と懇談を爲し愛と誠實なる友誼の談話を以て己の  
 靈魂を俗界の黄塵より脱して之を新鮮にし相互の愛を以て相慰めん  
 として其席に臨むべし使徒曰く我れ爾曹のものを求めず唯爾曹を求  
 むと(哥林後十二の十四)

○使徒曰く愛は不義を喜ばず眞理を喜ぶと(哥林前十三の六)吾人動も  
 すれば人の不義有罪なる行爲を見又は之を聞くや其行爲を喜び無智  
 の笑を以て恬然歡喜の意を表する悪習あり吾人の此所爲や悪しくハ  
 リストス教の本旨は背き愛情を缺き神の旨は戻るものにして吾人が  
 己の心は鄰に對するハリストス教的の愛を有せざるを示すなり蓋し  
 愛は不義を喜ばず眞理を喜ぶものなればなり吾人は向後此の如き舉

動を慎み不義を行ふ者と僭に定罪せらるゝを免れん。

○汝は動物に對しても憎惡復讐兇殺の氣を吐く勿れ恐くは汝の衷は  
 在りて無智無言の造物に向てすら惡氣を吐く無形の敵は汝の靈魂を  
 死に付し且つ汝をして人々を對しても憎惡と復讐の氣を吐くは慣れ  
 しめん夫の動物も其の生活の短期間は能くすべし丈け存在の樂を味  
 はんが爲め主の仁慈にて生活に召されたることは汝須く之を記憶せ  
 よ主は悉くの者に仁慈なり(聖詠百四十四の九)彼等無智の造物は假令  
 物を傷け又は汝の所有物を害することありとも彼等を打つ勿れ「家畜  
 を憐む者は福なり」(聖書の言)

○我が靈魂に意思の神聖なる平和洋々たる時は平和の王——主イエス

スハリストスが父及び聖神と共に確かに我が衷に居るなり斯かる時は平和の首たる者(神)に對して殊更感謝の情を厚ふし祈禱を行ひ内外の諸罪を排し以て極力己れ此の心中の平和を守らんことを努めざるべからず

○慰藉者聖神は全世界に充盈しつゝ信仰ありて溫柔謙遜善良質朴なる人間の悉くの靈魂を貫き之に住みて之を活し之を堅む彼は人間の靈魂と同一の靈として彼等の爲に光となり力となり平和となり喜びとなり諸の事業就中敬虔なる生活の進歩となり凡その善事を爲るなり彼は有智清淨の諸靈を貫く(ソロモンの睿智書七の廿三)我儕皆一靈に飲まれたり(哥林後十二の十三)敬虔の人々は恰も水を吸込みたる海

綿の如く神の惟一の神に吸込まれたるものなり。

○林の中國の間又は草野を徘徊しつゝ草木の嫩芽樹の實野に生ひ茂れる花の種々雑多なるを見て汝は己の爲め此の植物界より一の教課を取れ草木は春來れば必ず著しく芽を出し必ずその太さと長けを増し樹は年毎に恰もその天賦の力にて前進せんと努むるもの如し汝も亦須く言へ我も亦日毎に年毎に徳義上益々高尚となり益々善美となり益々完全となり主イエスハリストスの能力と我が衷とありて作用しつゝある彼の神の力にて天國若くは在天の父に至るの途に前進せざるべからずと草野が爛熳たる花にて綺羅粉黛を裝ふ如く我が靈魂の野も徳義の諸種の花にて之を修飾し又草木の花咲き實を結

夫が如く我が靈魂も信と善行の實を結はさるべからず。

○己の肉体を偏愛的に養ふ勿れ之を嬌す勿れ之が歡を求むる勿れ斯くして之は靈は反抗するの力を増さしむる勿れ然らざれば汝靈よて働かんとする時例へば祈禱し若くは宗教的徳義的の文を作らんとする時の如き肉躰の靈を凌駕して其手足を縛したるを見ん、肉体は靈の發情を悉く蹂躪し之をして起て其力を逞うするを得さらしむ然るときは靈は肉体の奴隸と爲らん。

○我が心よ冷酷抵抗嫉妬復讐の念を扶殖せんとして熱切に其働きを逞うする反抗力(魔鬼)のあればこそ人の神若くは隣に對する愛は殊更表顯して其潔白強固不變なるの点現はるれ抑も愛の我が心よ固定す

るは反對の勢力が愛を心より抜き去らんとし而も人が百方其反抗力に抵抗し敵との闘争に由りて己の愛を清め之を高尙鞏固とする時、在るなり此の如く神と隣に對する愛の爲に絶えず奮闘し毅然として動かす天の下の奸惡の諸靈と燃るか如き頑強なる無形の奮闘を爲す爲めにこそ主宰は神と隣に對する愛の功勞者よ天の赫々たる榮冠を編ひなれ夫の神を愛するよりして此世と此世に在る凡てのものを棄て、足跡の未だ到らざる空漠の野に隱匿し精舎に閉籠りて日夜神のこゝろを思念し祈禱を爲し我が意を斷ち禁食警醒神の爲に勞働しその神に對する信と望を動し就中其の神に對する愛を動さんと努むる反對の勢力より畢生攻撃を蒙りて之を忍びたる所謂克肖神父なる聖な

る功勞者は幾千の榮冠を受くるの價値あるなり神に對するの愛よりして己の肉体及び魔鬼——此狡猾強勢奸惡なる敵と戰ひ而もその之と戰ふや數時間數日間數月間の短日月に非ずして時として六十年七十年の多くの星霜なりとせんには其の得る所の榮冠果して如何ぞや夫の攻撃を受けずして斯く屢々墮落し一も勝つことなくして常に己の肉体に敗らるゝ此世に住むの人々は此の功勞者より比して如何ぞや我意のまゝに日を送り驕奢を極め快樂盡さる所なく飽食暖衣路加七の廿五傲慢にして名譽を求むるゝ汲々とし猜疑嫉妬吝嗇にして激憤し易く復讐の念深く娯樂を事とし酒色に溺るゝ等假令一人にして悉く之を行はずとも此等の諸愆に溺るゝ俗人は夫の聖なる功勞者より比

して果して如何ぞや彼等は生ながら毫も抵抗することなくして魔鬼の意のままに擒はせられたり故に魔鬼は敢て彼等を攻撃せず夙に其の網に罹りたるの彼等を死の前の安慰及び自棄に放任するなり。  
 ○汝須く惡を勝たるゝ勿れ乃ち善を以て惡を勝て(羅馬十二の廿一)てふ聖書の言を服膺せよ汝を遇するゝ不禮を以てし汝をして憤激せしめ汝を蔑視厭惡するも暴を以て暴を報ゆることなく温良柔和以て汝の前は於て無禮の舉動を爲す者より對して慇懃なれ之を尊敬し之を愛せよ汝若し自ら憤然として佛々粗暴輕蔑の言を吐かば汝は乃ち愛の情なく汝自ら惡を勝たれたる者よりして汝を侮辱したる者汝より向て醫者自らを醫せ(路加四の廿三)と云ひ或は汝何ぞ汝の兄弟の目にあるの



物屑を視て汝の目よ梁木のゐるを覺えざるや先づ己の目より梁木を  
 出せ(馬太七の三五)と云ふこと當然なるべし斯くする時は汝を辱むる  
 者又屢々汝に無禮を加ふることあるも怪む勿れ何となれば彼等は汝  
 の弱點を看破して故意に汝を激せしむべければなり汝惡に勝たるゝ  
 勿れ乃ち善を以て惡に勝て汝を侮辱したる者よ對し彼が汝を侮辱し  
 たるよ非ずして己を侮辱したるを示し彼が斯く容易く己の慾に勝た  
 れ心靈上の病者たるを誠心痛惜し彼が粗暴性急にして汝を嫉視する  
 の深きだけ益々彼に溫柔と愛とを示すべし然らば汝は確かに彼に勝  
 たん善の勢力は常に惡より強し故に常に勝を占む又汝は吾人皆在弱  
 ゝして非常に容易く諸慾に勝たるゝを記臆し汝も亦汝の兄弟の病め

るが如き病に罹ること屢々之れあるを知り汝に對して罪を犯す者を  
 遇するに溫柔寛容を以てし汝に債を負ふ者の債を免すべしさらば在  
 天の父も亦汝に債を負ふ者の債に比すべからざるは多き汝の債を  
 も免さん汝は常に悠々として心を高尚にし人の惡を記臆せず毅然と  
 して質樸善良なれざらば汝は常に敵に勝たん惡人を責むる者は疵を  
 己に獲ん嘲笑者を責むること勿れ恐らくは彼汝を惡まん……智慧あ  
 る者よ授けよ彼は益々智慧を得ん(箴言九の七、九)

○吾人が兄弟若くば社會に罪若くば弊風の行はるゝを見る時敵は吾  
 人に對して奸計を運らし吾人の心を誘ふに之に對する無差別冷淡を  
 以てし侃々諤々其不義非道を詰責し以て罪人の角を挫くを好まざる

の念を起めしめ怯懦言ふを得ざらしむ。ハリストス王よ我が心よ使徒の熱心と聖神の火を賜ひ我をして常々侃々諤々世の恬として耻ぢざる弊風就中多くの人々も傳染したるの弊風を詰責し何人をも其救贖の爲め之を寛恕せず又汝の他の人々をも警戒し之をして弊風悪俗の横流するを見て之に誘はれ以て自ら罪に陥るを免れしめよ。我を信する此小子の中の一人を礙かする者は寧ろ磨石を其頸に懸けて海の深みよ沈むるを優れりとす。蓋し人の子の來れるは亡びし者を尋ねて救はんが爲めなり(馬太十八の六、十一)

○己の善行を算へんどの愚かなる思想汝の首に泛ぶ時は直よ其非を悟りて之を悔め寧ろ至仁公義の主宰の絶えず侮辱したる己の無数の

罪を算へよ然らば汝の罪は濱の砂の如く徳行は之よ比して殆ど無一等しきを發見せん。

○汝の心吝嗇も襲はるゝ時は自ら云へ我が生命はハリストス總ての愛にして是れ我が無盡藏なる富盡きざるの食汲み盡されぬ飲物なりと吾人の無智蒙昧なる肉體は食物と金銭に於て生命を得んと欲し此の生活の物質的方法を奪ふ者を仇敵視す然れども汝は眞生命は金銭食物も非ずして神を愛するが爲めの相愛なりと確信せよ汝須く神は凡ての有生物を愛の法則にて結合し愛の一致よりして生命を生ずる大愛なりと知れ。

○祈禱の時よは舌よて千万の言を言はんより寧ろ赤心を以て五言を

唱ふるを勝れりとするの箴を守れ汝の心冷々淡々として祈禱するを  
 欲せざる如く感ずる時は先づ止まりて例へば己の頑迷己の心霊上の  
 究乏蒙昧等を想像し若くは汝及び人類就中「ハリストス・タイアニン」に時々  
 刻々垂れらるゝ神の仁慈を想像して汝の心を暖め而して後急がず暖  
 かなる情を以て祈禱せよ假令定刻まで悉く祈禱を誦し得ざるも可  
 なり暖かなる急かざる祈禱よりして得る所の益は大よして汝假令悉  
 く祈禱を誦し畢るも急かざりて感ぜなく祈禱して得る所のものに比すべ  
 くもわらず千万の言を語らんより寧ろ五言を語るを善とす(哥林前十  
 四の十九)然れども吾人若し祈禱に於て相當の感情を以てしたらんよ  
 は千万の言を唱ふるも固より可なり主は己の爲に勞し時久しく己の

前に立つ者を顧みさることなし人の量る所の量を以て彼も亦之を量  
 り其祈禱の真意に出でたる言の豊富なるに應じて其心霊は心霊的の  
 光心霊的の暖み平和及び喜びを豊かに遣はし給ふなり時久しく断え  
 す祈禱するは善し然れども此言は人皆納るゝ能はず唯稟賦の者之を  
 能せん納るゝことを得る者は之を納るべし(馬太十九の十一十六)長時  
 間の祈禱を納るゝこと能はざる者は寧ろ簡短に而も熱心な祈禱する  
 を善とす。

○麵包及び葡萄酒の化してハリストスの眞体眞血と爲り彼れの神性  
 及び靈魂と合するの常に行はるゝ奇跡よりして我は常に神の呼吸に  
 て人よ生を予へられ其の生ある靈よ造らるゝの奇跡を視る聖書よは

人即ち生ある靈となりぬと云はれたりしが聖體機密に於ては麵包と葡萄酒は變形の後管よ生ある靈となるのみならず生を予ふる靈と爲るなり哥林前十五の四十五創世記二の七而して此事たる皆我が目前に行はれ我は靈魂及び肉体よて之を實驗し現よ之を感す我が神よ爾の行ふ所の機密は畏るべきものなる哉爾は我をして言ひ盡すこと能はざる機密の實見者及び干與者たらしめたり我が造者よ爾よ光榮を歸す。

○神の聖人すら悪魔の失望憂悶に悩まされたり吾人罪人よ至りては如何ア、敵は屢々吾人を傷ふに忿激と侮蔑と烈しき憂悶を以てす吾人は常よ主よ心に向け一瞬一秒も彼と離るゝことなく敵の忿激憂悶

をして吾人を制壓せしめさらしむべし敵の憂悶を免るゝの方法猶一あり此世の廣き路是なり汝此世の娛樂よ耽らば少くとも娛樂よ耽るの間憂悶は汝を棄て去らん而も後又汝を此娛樂よ誘引し娛樂は汝の爲よ必要欠くべからざるものと爲り汝は之よ於てのみ快樂を覺ゆるに至らんされを願くば神ハリスティアンを守り此の如き方法よて悪魔の憂悶を免かれしむる毋れ寧ろ穿き路を行き憂悶を忍び己の救贖の爲め勞する者をして歡喜するを得せしむるの主イエススハリストスよ向て屢々扶助救脱を求むるは此世の寛く滑かなる路よ下り身体の娛樂よて憂悶の靈より自由を購ふよ勝るなり敵は憂悶の靈を以て多くの人を穿くして救贖を得るの路より逐ひ寛く且つ滑かよして

而も滅亡の導きの路に陥れたり。

○汝祈禱することあらん。汝の祈禱は有効に行はれ、汝は主が其祈禱を聴き之を嘉みする心證を有し、汝の思想平安にして心中輕快々々たらん、されど汝の祈禱の終に臨み、汝の心と汝の思慮の微々たる衰弱よりして重き荷の如きもの、汝の心を衰弱せしむる火の如きもの、汝の心に入り、汝は前の爽快と祈禱好きの念より引替へて祈禱の甚だ重く之を厭ふの念起るを感ずることあらん、友よ絶望する勿れ、是れ吾人を弄ばんとする敵の奸策なり、彼は就中吾人の敬虔なる事を營むの終に於て吾人を弄び、吾人をして憂悶仲々たらしめ、吾人の神聖なる事業に對する以前の勞を以て悉く無に歸したりと思はしめんとす、汝は之よりし

て以後祈禱の間は決して一瞬間たりとも己の靈を熄さず、靈と眞とを以て倦まず、祈禱し、祈禱は於て一言たりとも主に諂はず、即ち一言たりとも詐りて偽善的に唱へず、汝の祈禱をして悉く眞理の表彰、聖神の喇叭たらしめ、一言たりとも敵の偽り役せしめず、悪魔の機關たらざらしめんことを學ぶべし、汝宜く主の前より己の罪に祈禱を唱ふる時、於ける偽善を誠心に告白して、汝の靈魂より敵の重荷を卸し、其火を熄さんことを切實に神に祈るべし、然らば爽快と安和を得ん、急ぐ勿れ、心安らかにして言ひ且つ行ふべし、敵は急がして擾乱す、何となれば狼狽躁急の中よりは秩序紊乱すればなり。

○我等の父よ、願くは爾の國來らんことを、主は到る處より王と爲り、凡て

の有形世界(即ち凡ての場所)に在り、と凡ての天使の會を統御し、己の無限の全能と公義とを以て惡靈及び惡人若くば不義の人々をも統御し、其中の一は幽暗の永遠の鍵鎖に繋ぎて大日の審判を待ち、一は此世に於て既に種々の罰を加へ未來に於ては熄えざるの火を以て之を罰す、然れども彼は眞理なるを以て己の眞理を以て惡鬼及び不敬虔の人々、王たらず其の詐偽なるを以てなり、又彼は愛を以て之、王たらず其の奸惡なるを以てなり、不敬虔の人々、は彼れ信を以て王たらず、望と愛とを以て王たらず、之に己の法を遵守せしむるを以て王たらず、爾曹我が言ふことを行はずして何ぞ我を主よ主よと稱ふるや(路加六の四十六)爾曹我が誠を守れ(約翰十四の十五)彼は我が身体と靈魂の徹たる天

然的の各動作(例へば言語をも一々統御す)——蓋し我が身体は養育安息睡眠成長歩行に關して彼れの法に服従し意志と言語は彼れの法に循ひて成立動作するなり——と雖も我が心我が心中の意嚮我が自由の思想は常に必ずしも王たらず、我は屢々惡に傾き我が當り行ふべき善の代り、惡を行ふことあるなり、我は屢々彼れに抵抗し彼れの法に背戻す、我は動もすれば弱信不信自愛傲慢他人を蔑視し嫉妬吝嗇貪婪利慾に耽り肉慾に溺れ己の有罪なる肉體の歡をのみ得んとし名譽を博せんとし忍耐乏く忿激し易く懶惰にして善事を行ふことなく或は之を行ふことあるも甚だ少く而も自由の意嚮心の誘致に由らんより寧ろ事情に驅られて行ふこと多く困究する者を見るも教會の一の身体

の肢として憫憐の情を起すことなく一言以て之を云へば主は意思を以て情を以て信望愛の行を以て常は必ずしも我に王たらざるなり。

○吾人の身靈と其の幸不幸吾人の凡ての財産生活の凡ての境遇は皆之を神より受け神の権能より受けたるものにして万有より受けず偶然に得たるもの非ず己れより受けたるもの非ずと心は常に確信せんが爲め祈禱すること必要なり汝神よ祈禱せざらんか忽ち心よて己の施恩者造者及び主たる者を忘れ彼を忘るゝと共に有らゆる悪も沈溺せん視よ祈禱が常に汝も實際的の益を予ふるを。

①靈魂の能力も身体の勢力も之を修練するよ由りて完成し増長し堅牢と爲るなり試に書も縫物に編物に其手を修練せよ善く書き善く縫

ひ善く編むに至らん屢々文を作ること修練せよ容易く巧み文を作るを得ん善を行ふこと若くは情慾を制し誘惑に勝つことよ修練せよ善事を行ふこと漸次も容易く且つ愉快と爲り神の全能なる恩寵の佑助よ由りて慾を制すること易々と爲らんされど若し書かず縫はず編まず若くは書くこと縫ふこと編むこと稀れならんよは書くこと縫ふこと編むこと共に拙かるべし一も文を作らず若くはこれを作ることを甚だ稀よて獨り度生の物質的煩慮のみ耽りたらんには恐らく數語を綴ることすら猶且つ難く宗教的作文の如き就中至難よして偶其の一の作りたる文はエキペト流の工事たらんのみ汝若し祈禱せず若くは祈禱すること稀ならんよは祈禱は汝の意よ適せず汝に取りて其重

さきこと万斤の重負の如くならん情慾と闘はず或は之と闘ふこと稀よして且つ軟弱ならんは之と闘ふこと亦甚た難くして屢々之は弱るべし汝此の奸悪よして常よ汝の心よ棲息する汝の内心の敵に勝つことよ慣れずんば高枕安臥する能はず之よ由りて己の生命を害はん此の如く何事よ於ても勞働は必要なり勞働なきの生命は生命よして生命よ非す不具の如きもの生命の幻像の如きのみ故に肉体の怠惰と常よ頑強の闘争を爲すは凡ての人間の義務なり願くは「ハリステイアニ」たる者之に背くなからんことを夫れハリステイアニ屬する者は懶惰奸悪よして罪を好むの肉躰を其情及び慾と共よ十字架よ釘したり(加拉五の廿四)凡そ有る者よは予へられて餘裕あり無き者はその有る者を

も奪はれん(馬太廿五の廿九)

○吾人よ對して侮辱を加ふるの人は是れ病人なり其心よ漆灰なる愛を塗付け之が歡を取り之と語るよ慰勸と愛情を以てすべし而して彼吾人よ對する執拗なる惡念を懐くよ非ずして一時の忿激よ過ぎざりしならんは汝果して其心若くはその惡念は吾人の慰勸と愛情に由りて溶解し善の惡よ勝つを見ん「ハリステイアニ」は常よ善且つ賢よして善を以て惡よ勝たざるべからず。

○人の侮辱を蒙りたりとて怨を合む勿れ汝を侮辱したる者汝よ向て慰勸の態を示し汝よ對して語を交ゆる時よ己の心を惡よ傾くることなく慰勸よ歡話し恰も汝と彼の間よ何事もなかりしが如くし善を以



て悪く勝ち仁慈と溫柔と謙遜を以て嫉悪に勝たんことを練習すべし  
汝を侮辱したる者も對し心切に彼れ何の面目ありて我と語を交ゆる  
か彼れ我を侮辱して我もその侮辱を謝せず我は彼と語るを屑とせず  
彼を排斥輕蔑し以て我を侮辱するの結果如何なるかを知らしめんと  
謂ふ勿れ汝傲然怨を含みて斯く言ふ勿れ恐らくは汝殘忍なる由り  
て主の怒を招かん。

○物質世界は主も對して無も似たり獨り屬神的の者は稍存在するも  
の、如し天使及び人間是なり神も近く神の像と肖とを有するの造物  
のみ確乎たる存在を有し其他の造物は影の如く過ぎ去るなり天地そ  
のものは廢せんされど我が言は廢せし馬可十三の卅一

○魔鬼が地獄の塵芥——吾人の裏に甚多く且頗る細微よして種々なる  
—地獄の塵芥を以て吾人の靈魂を梗塞せんとすることは常も記憶せ  
ざるべからず故も復讐の念にて或は驕傲よて或は不耐と激怒よて  
或は兄弟若くは己の爲も有形の所有物を使用するを惜むこと即ち吝  
嗇よて或は貪婪及び利慾にて或は他人の穩かならざる侮辱の言よて  
或は憂悶と失望よて或は嫉妬にて或は疑惑よて或は薄信よて或は天  
啓の眞理も對する不信にて或は虚名を博せんとの念にて或は祈禱及  
び諸の善事と總体奉事に對して怠惰なるも由り汝の心の目味じこと  
あらば心中確信して言ふべし是れ魔鬼の塵芥地獄の幽暗なりと主に  
對するの信と望を懷き奮醒自ら省みて怠らざるも於ては神の扶助を

以て地獄の塵芥と幽暗とを避くるを得べし神よ由りて生れたる者は自ら守る悪き者之に觸れず(約翰一書五の十八)

○我か幸と不幸は心中の思想と意嚮に包含す若し我が心の思想と意嚮よして神の眞理若くは我が神の旨よ符合したらんよは我が心安穩よして心靈的の光喜悅幸福よて充たさるゝも若し然らざるよ爲ては我が心安かならずして心靈的の靈魂を腐らす幽暗重負憂悶よ充たさる若し詐偽よして神に背戻する心の思想及び意嚮を全然眞誠よして神の旨よ適ふものよ代へたらんよは再び我が心安穩よして幸福ならん。

○隣は我と同權の者我と同く人間よして同く是れ神の像なり而して

彼れ我と同じきを以て我の彼を愛すること己を愛するが如くせさるべからず『汝の隣を愛すること己の如くせよ』(馬太廿二、卅九)即ち彼を見ること己の肉と血とを守るが如くし彼を遇するよ愛を以てし溫柔懇勸を以てし其過失を恕すること自ら好んで己を恕し自ら他人より赦免若くは我が在弱よ對し寛容を垂れられんことを渴望するが如くし言を換へて云へば其過失を認めずして曾て之れあらざりしが如くし若くは之を認むるも懇勸溫柔愛情善意を以てすべし。

○疑なきの信を以て施生の機密を領し敵の總ての奸計總ての讒言に勝たんとせば汝が聖爵より領する所のものは即ち獨り有る者なるを思へ此の如き思想意思を懷く時は汝は聖機密を受領するよ由りて安

慰し歡樂し生々活潑と爲りて心中眞實に確かに主の汝に居り汝の主  
に居るを知らん是れ實驗なり。

○汝は女幸に祈るに當りて之を仁愛鴻慈の淵と稱す汝亦自ら汝の仁  
愛鴻慈を要する者よ對し仁愛鴻慈を垂るゝの力を以て彼に倣へ之を  
惜ます之を輕蔑せず乃ち彼等が汝の助力を請ふの益々切なるは從て  
益々深く之を愛せよ屬々己を彼等の位置に立て、明晰に公平に福音  
的の彼等の境遇を細思せよ然らば女幸も汝に己の矜恤を垂れん。

○汝の言ふ所一々相同からず或は汝の靈魂——且恐くは汝の隣の靈魂  
をも——活かすことあり或は亡ぼすことあり故に聖書に曰く爾曹の言  
常は恩を用ひ且鹽を以て調味べし(哥羅四の六)凡て汚れたる言を爾曹

の口より出すこと勿れ惟聽者をして益あらしむべし(以弗所四の廿九)

○無形体の敵が酒食に由りて人の心に入り込むは苟も心ある者之を  
知らん是れ夫の飲酒に耽るに從ひ酒を嗜むの念益々甚しく増長する  
所以にして即ち敵の勢力募りて人力を制するに依るなり沈湎者には  
之をして知らず識らず内心飲酒を嗜むの慾情を満足せしめ此の心中  
の不幸なる敵に傾かんとするの勢力現著たり何を以て飲酒の敵を逐  
ひ斥くべきか他なし祈禱及び齋戒是なり敵の人心に入り人々が肉  
体の情慾肉慾に耽りて祈禱せざるに乘ずるなりされば之と反對の原  
因たる齋戒及び祈禱を以てせば其の出て去るや當然なり。

○若し夫れ吾人に預め神の恩寵賜はらす若し神の恩寵は罪を犯した

る後直<sup>のち</sup>又<sup>また</sup>突然<sup>とつぜん</sup>我<sup>われ</sup>全体<sup>ぜんたい</sup>を包括<sup>くわく</sup>し自ら<sup>みづか</sup>之<sup>を</sup>して痛悔<sup>つうかい</sup>流涕<sup>りゅうてい</sup>するの念<sup>ねん</sup>を起<sup>おこ</sup>さしめずんば果<sup>はた</sup>して如何<sup>いか</sup>よぞや若<sup>も</sup>し吾人<sup>われびん</sup>をして獨力<sup>どくりき</sup>其恩寵<sup>おんちゆう</sup>を得<sup>え</sup>べきこととせられたらんよは果<sup>はた</sup>して如何<sup>いか</sup>よぞや若<sup>も</sup>し然<sup>しか</sup>らんにはア、吾人<sup>われびん</sup>憐<sup>あは</sup>れなる人間<sup>にんげん</sup>は罪<sup>つみ</sup>の重負<sup>おもい</sup>より脱<sup>だつ</sup>すること甚<sup>はなは</sup>た稀<sup>ま</sup>れなるべし蓋<sup>い</sup>し吾人<sup>われびん</sup>の天性<sup>てんせい</sup>たる概<sup>がい</sup>して勤勉<sup>きんべん</sup>勞苦<sup>らうく</sup>——就<sup>なつかん</sup>中屬<sup>ちゆうじゆく</sup>神<sup>しん</sup>的生活<sup>せいかつ</sup>上<sup>じやう</sup>に於<sup>お</sup>ける勤勉<sup>きんべん</sup>勞苦<sup>らうく</sup>を執<sup>し</sup>るに懶<sup>おろそ</sup>くして他<sup>た</sup>の佑助<sup>いうじよ</sup>なく屬<sup>ぞく</sup>神<sup>しん</sup>的<sup>てき</sup>勞働<sup>らうどう</sup>を大<sup>おほ</sup>に和<sup>やは</sup>らげられ慰<sup>なぐさ</sup>めらるゝよ非<sup>あ</sup>ずんば恐<sup>おそ</sup>らくは己<sup>おのれ</sup>の救贖<sup>きうじやく</sup>の事業<sup>じぎやう</sup>を抛<sup>なげ</sup>たん今<sup>いま</sup>や睿<sup>ち</sup>智<sup>ち</sup>なる神<sup>しん</sup>至<sup>し</sup>仁<sup>にん</sup>の父<sup>ちち</sup>は或<sup>ある</sup>は吾人<sup>われびん</sup>の屬<sup>ぞく</sup>神<sup>しん</sup>的<sup>てき</sup>重負<sup>おもい</sup>を輕<sup>かろ</sup>くし或<sup>ある</sup>は時<sup>とき</sup>として吾人<sup>われびん</sup>を試<sup>こころ</sup>むるが爲<sup>ため</sup>め吾人<sup>われびん</sup>をして忍<sup>にん</sup>耐<sup>たい</sup>と己<sup>おのれ</sup>の狡<sup>うさ</sup>猾<sup>くわつ</sup>なる滅<sup>めつ</sup>亡<sup>ぼう</sup>よ導<sup>みち</sup>くの肉<sup>にく</sup>体<sup>たい</sup>を疲<sup>ひ</sup>困<sup>こん</sup>せしむること<sup>こと</sup>に鍊<sup>れん</sup>習<sup>じゆ</sup>せしめんが爲<sup>ため</sup>め更<sup>さら</sup>に其<sup>その</sup>荷<sup>に</sup>を重<sup>おも</sup>くし巧<sup>たくみ</sup>よ彼<sup>かれ</sup>此<sup>こ</sup>相<sup>あ</sup>交<sup>か</sup>換<sup>かん</sup>せしむ

是<sup>これ</sup>を以<sup>も</sup>て我<sup>われ</sup>が救贖<sup>きうじやく</sup>の事業<sup>じぎやう</sup>は神<sup>しん</sup>の恩寵<sup>おんちゆう</sup>よ由<sup>よ</sup>りて吾人<sup>われびん</sup>よ取<sup>と</sup>り左<sup>ひだり</sup>まで至<sup>いた</sup>難<sup>なん</sup>ならで反<sup>かへ</sup>て甚<sup>はなは</sup>だ快<sup>こころよ</sup>く成<sup>な</sup>し遂<sup>つい</sup>げらるゝことすら往<sup>むか</sup>々<sup>むかむか</sup>之<sup>これ</sup>れあるなり。  
 ○敵<sup>てき</sup>が主<sup>しゆ</sup>の祭<sup>まつり</sup>日<sup>じつ</sup>よ、ハリステアニンが祭<sup>まつり</sup>日<sup>じつ</sup>の大<sup>だい</sup>なれば大<sup>だい</sup>なるだけ敵<sup>てき</sup>よ大<sup>だい</sup>なる貢<sup>みつぎ</sup>を納<sup>な</sup>して、ハリステアニンが祭<sup>まつり</sup>日<sup>じつ</sup>の大<sup>だい</sup>なれば大<sup>だい</sup>なるだけ敵<sup>てき</sup>よ大<sup>だい</sup>なる貢<sup>みつぎ</sup>を納<sup>な</sup>するは吾人<sup>われびん</sup>の見て甚<sup>はなは</sup>だ悲<sup>かな</sup>む所<sup>ところ</sup>なり蓋<sup>い</sup>し吾人<sup>われびん</sup>の祭<sup>まつり</sup>日<sup>じつ</sup>に目<sup>め</sup>撃<sup>げ</sup>する所<sup>ところ</sup>何<sup>なに</sup>ぞ懶<sup>おろそ</sup>惰<sup>だ</sup>放<sup>ほう</sup>縱<sup>じゆう</sup>沈<sup>ちん</sup>湮<sup>いん</sup>淫<sup>いん</sup>逸<sup>いつ</sup>喧<sup>けん</sup>争<sup>しゆう</sup>竊<sup>せつ</sup>盜<sup>たう</sup>遊<sup>ゆう</sup>蕩<sup>たう</sup>なり我<sup>われ</sup>が神<sup>しん</sup>よ肉<sup>にく</sup>体<sup>たい</sup>の娛<sup>たの</sup>み何<sup>なに</sup>ぞ甚<sup>はなは</sup>だしき魔<sup>ま</sup>鬼<sup>き</sup>に事<sup>つか</sup>ふること何<sup>なに</sup>ぞ其<sup>その</sup>熱<sup>ねつ</sup>心<sup>しん</sup>なる汝<sup>なんぢ</sup>は思<sup>おも</sup>はん是<sup>これ</sup>れ豈<sup>いか</sup>に神<sup>しん</sup>子<sup>こ</sup>の貴<sup>たか</sup>き血<sup>ち</sup>よて贖<sup>あが</sup>はれたる、ハリステアニンなるか今<sup>いま</sup>は是<sup>これ</sup>れハリステアニン教<sup>きやう</sup>の時<sup>とき</sup>代<sup>だい</sup>なるか將<sup>まさ</sup>に異<sup>い</sup>教<sup>きやう</sup>の時<sup>とき</sup>代<sup>だい</sup>なるか是<sup>これ</sup>れ豈<sup>いか</sup>に施<sup>し</sup>生<sup>せい</sup>的<sup>てき</sup>機<sup>き</sup>密<sup>みつ</sup>を領<sup>りやう</sup>したる人<sup>ひと</sup>やなるか是<sup>これ</sup>れ豈<sup>いか</sup>に神<sup>しん</sup>の殿<sup>でん</sup>よ立<sup>た</sup>ち汝<sup>なんぢ</sup>と偕<sup>い</sup>に主<sup>しゆ</sup>に祈<sup>いの</sup>るの人<sup>ひと</sup>々なるか若<sup>も</sup>し果<sup>はた</sup>

して然らば彼等の聖堂に詣ふては何故ぞ想ふに只習慣に依りたるのみよして救主ハリストスに對する感謝の情に依るゝ非ざりしならん。想ふに彼等は神に祈禱せず己の心にて彼に近つかず只己の口のみを以て彼に近つき—口のみにてなりとも近つかば猶ほ可なり—祭日の趣旨を知らず概してハリストス教の祭日の本旨と目的とを了解せず夫の子女が己の両親の家庭の祭に與かるが如くよして之に與からず彼等は愛情深く慈善神聖の母なる教會に於ける惡兒なる哉母は神聖にして子は罪人なり母は屬神的にして子は肉體的なり母は天のものにして子は地に屬するものなり母は朽つべき浮雲の幸福に代へて永遠屬神的の幸福を其子に予へんと欲するよ子は之を斥けて此世

の有罪よして過ぎ去るべき娛樂を求めんとすされど祭日に於て醜行に耽る者の内會て聖堂に詣でざりし者多くあるを見ん彼等は未だ會て祭日のことよ思到らざりしが故に全く祭日の趣旨を解せざるなり此の如き輩の爲めよは只肉體の祭日あるのみ嗚呼吾人司祭は何れの時よ至るまで主の祭日よ於ける無禮不法を忍びて之を不問に付すべきか神の司祭の中豈にイリヤ或はフィチエス或はイサイヤ或はイエレミヤの熱心を懷きて聖神の能力を以て新イスラエリに於ける主の祭日の弊を責め己の能力己の生命を犠牲として「ハリステイアニン間」の此弊を一掃し以て神の榮を宣揚せんとする者無きか主よ吾人は果して何れの時爾の祭日を神聖のものとして聖にするよ至るべきか吾

人は果して何れの時教會の成規に服従し以て己の神聖の母なる教會を安慰するに至らしむべきか吾人は何れの時彼れの精神を飲み込むべきか吾人は何れの時よ至るまで正教の救贖的の大事事件の祭を精神にて祭り始めつゝ肉体よて之を終るべきか敵をして何れの時に至るまでハリストスの肢なるハリステイアニンを嘲笑せしむべきか他宗他派の人々をして何れの時よ至るまで吾人を指して視よ是れ正教徒と稱するのハリステイアニンなり其品行何たる事ぞ其の熱心の信仰如何其教理を解すること此の如く彼等の司祭果して何たる者ぞ彼等が人民よ教理を解くこと如何よ杜撰よして之よ祭日の主意と其目的を説明すること何ぞ其れ勉めざるや之よ信仰よ循て生活すべきを教ふる

こと何ぞ其れ怠るの甚しきやと云はしむるや吾神よ我が正教と我々牧師よ對するの誹謗何ぞ甚しきやされど吾人牧師よ關して言ふ所或は其當を得たるやも知るべからずハリステイアニンが當然よ祭日を送らざることよ關しては吾人も亦大よ與かりて罪あり吾人は之を譴責せず之を禁せず恒忍勸諭以てハリステイアニンの祭日を送り概してハリステイアニンの生活すべきことを説諭せず吾人は懶惰沈湎放縱の非を鳴らすこと少く吾人は神の聖堂に於て神の言を以て——甚しくハリステイアニンの感染したる——此等の悪習を侃々として責むることなし吾人は常よ必ずしも沈湎淫亂の行あるを以て世よ知られたる人を聖爵より斥ぞげ以て他を憐れずことなく之よ依り此の感染し易き

卑陋の悪習をして益々猖獗ならしめ吾人は教會の嚴罰を蒙るべき人々に對し痛悔機密に於て輕き「エビティミヤ」を科し且つ其の科したる「エビティミヤ」すら當然之を履行するや否や注意せず公義の神よ牧者も被牧者も爾の前は推諉すべきなし』皆曲りて全く邪となれり我儕の間は善を行ふ者なし一人だもあるなし』羅馬三の十二「吾人生活上の現時の不規律の前途果して如何なるべきか罪惡は此世は漲り敵の國は擴がり爾の國は縮少し爾の其心は宿る被選者少くして其心は古來の兇殺者が盜の如く潛居する魔鬼の僕甚た多し主よ爾は吾人を如何よせんとするか爾の約の血は地より叫べども爾の福音の聲は「ハリステイア」の心に貫徹せず爾の誠は蔑如せられ教會の成規は蹂躪せらる

主よ我等を如何よせんとするか主よ願くは己の利を求めず哥林多前十三の五乃ち爾の「ハリステイア」の爲に圖る熱心銳意の敏腕家を爾の畑に遣はし之を預言者たり使徒たるの能と智とを賜ひ之をして日夜倦むことなく人の心の畑を耕しめ給へ。

○人動もすれば則ち云ふ吾人は幾もなく祈禱に倦むと是れ何故ぞ他なし爾は己の前に明々地に汝の右に在るの主(聖詠十五の八參看)を想見せざるに依るなり汝心の目を以て絶えず彼を見よ然らば終夜立つて祈禱するも倦まざらん予は夜と云へり然り三日三夜立つも猶且倦まざらん試みよ登塔者のことを思へ彼等は祈禱の心地にて多年塔上に立ち汝の如く彼等に取りても懶惰に傾き易き肉体を制したり然る

に汝は數時間の公祈禱に堪へ難しとし一時間すら之を難んず。  
 ○愛は悪を思はず。悪は其何たるを問はず之を思念するは魔鬼の所  
 爲なり魔鬼は人の裡に居り人と共に之を思念す故に友に對して如何  
 なる悪をも心に懐くなく之を思念することなく魔鬼と同化する母れ  
 汝善を以て惡——凡そ汝に見ゆる所の惡——に勝て羅馬十二の廿二汝の  
 属神的の機智とハリストス教的爱の功は實に茲に存するなり。

靜民錄卷之一

明治三十二年十一月一日印刷  
 明治三十三年十一月十日發行

翻譯者

上田 將

東京市牛込區市ヶ谷左内坂町卅四番地

印刷者

宮部 謙

東京市麹町區富士見町五丁目十九番地

印刷所

岡本活版所

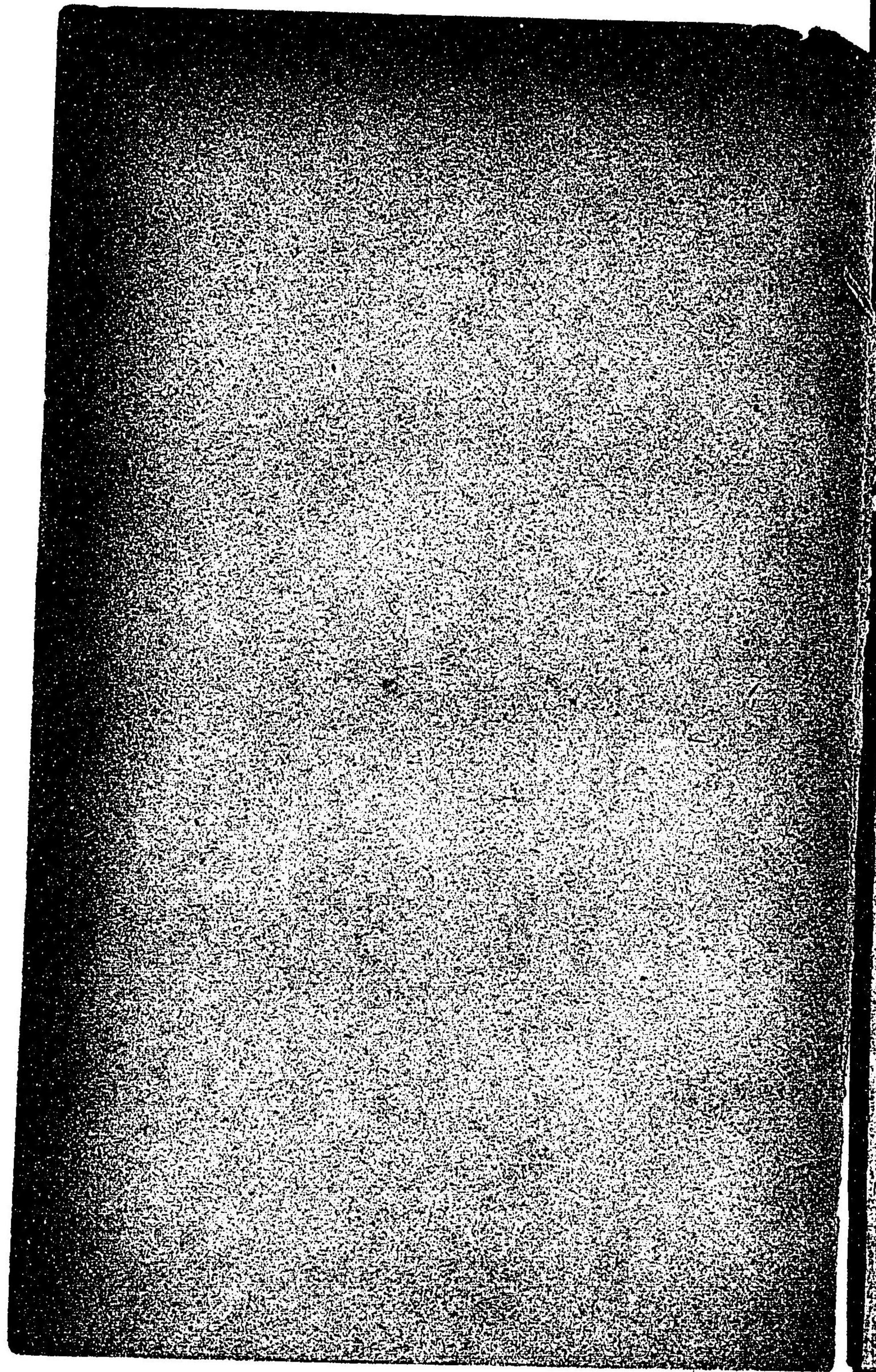
東京市麹町區麹町十丁目四番地

發行所

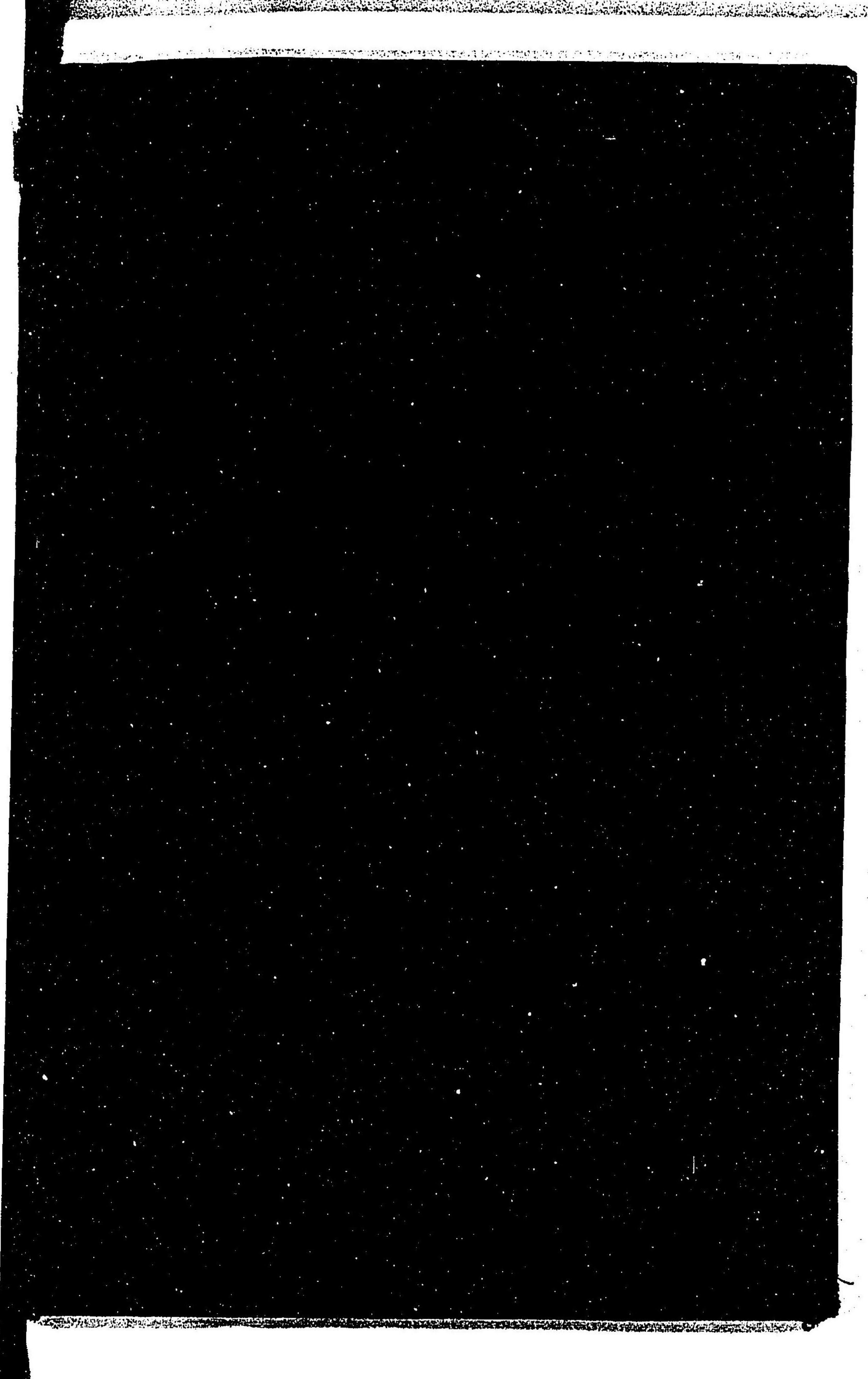
正教會編輯局

東京市神田區駿河臺東紅梅町六番地





88
47



Ⓜ

020916-001-9

88-47

静思録 第1-4

イオアン・セルギエフ/著

1冊

M33-38 .

ABI-0761



